

2014年度 地域の子ども研究会

“地域の子どもたちの豊かな生活・成長を目指す”

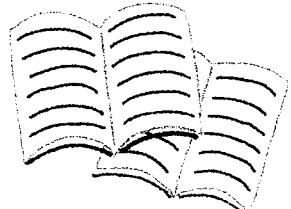
目次

研究活動の報告

- 子どもたちが安心して幸せに生きていくうえで大切なものは

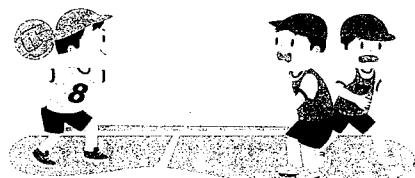
～愛着障害について学び、家庭支援について考える～

- 市域の子どもたちの放課後と関わる指導員の役割



子どもたちとの活動の報告

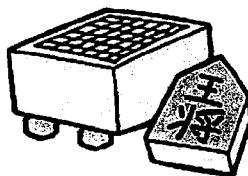
- 第29回ともだちドッジボール大会



- 第44回ともだち運動会



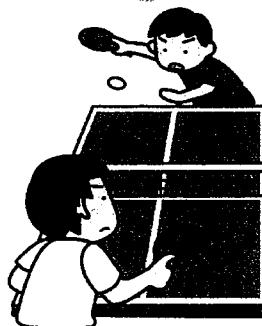
- 第19回子ども将棋大会



- 春のあそび王国



- 第63回大阪市子ども卓球大会

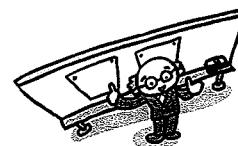


- 自然体験活動 ワークキャンプ

- 自然体験施設応援バザーと中高生 OBOG 活動

研修活動の報告と1年の振り返り

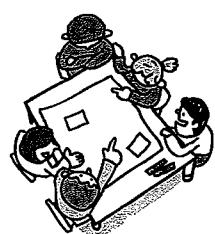
- 卓球指導者研修会



- キャンプファイヤー研修会



- 研究会時間内での情報交換について



- 指導員一人一人の振り返りと次年度へ向けて



研究活動の報告

- 子どもたちが安心して幸せに生きていくうえで大切なものは
～愛着障害について学び、家庭支援について考える～
- 市域の子どもたちの放課後と関わる指導員の役割

子どもたちが安心して幸せに生きていくうえで大切なものは ～愛着障害について学び、家庭支援について考える～

【研究活動メンバー】

辻井歩（愛染橋児童館学童クラブ）、吉野裕志（阿さひ保育園つくし会）、加藤由美（今川学園子どもの家）、尾崎芳江（都島児童館）、角中恒介（やまと保育園子どもの家）、坂本晴佳（やまと保育園子どもの家）

【研究テーマに至った経緯】

今年度の研究活動について何を学びたいのか？という事を考え日々の子どもたちの関わりから気になることや学びたいことについて話し合った。その中でも、「保護者対応」についてよく話題があがった。私たち指導員は、保護者と共に子どもたちの豊かで健やかな生活や成長を目指しているなか、保護者と関わることも日常的にある。その中でも、誰もが悩むことがある「保護者対応の難しさ」や「保護者と子どもの関わりで気になる姿」や「保護者の考え方の変化」について話し合った。そこで、私たち指導員は当初、「保護者にもっと理解してほしい」「保護者にもっと子どものことを見てほしい」といた子どもの立場にたって考える事が多かったが、視点を変えて「保護者」にスポットライトを当てて研究を行うことにした。

親子の関わりを考えた際、乳幼児期には抱っこをしたり親子関係でスキンシップが行われるが、学童期になるとどうだろうか・・・まだまだ会話を中心とした関わりの中で親にとって子どもが愛おしい尊い存在であることを伝えているのだろう。その親子の愛情表現が一方的であったり、上手く疎通していないのではと感じる場合がある。そういうった親子関係から保護者の方の背景にはどういったものがあるのかを考えると「愛着障がい」という言葉がてきた。この愛着障がいは、子どもの頃に育った家庭環境や愛情環境により、親となった時に我子との愛着に関する悩みをもち子育てに影響を与えると奥深いものであった。私たち指導員は、愛着障がいについて学び、これから保護者支援・家庭支援に繋げていこうと研究テーマを「子どもたちが安心して幸せに生きていくうえで大切なものは～愛着障害について学び、家庭支援について考える～」に決定した。

【研究活動の方法】

愛着障害について知るために、書物「愛着障害 子ども時代を引きずる人々 著：岡田尊司」を参考文献とし研究活動メンバーで熟読する。その後、愛着障害について知り意見交換を行い、現場のケース検討から考察し今後の関わりについて考える。最後に、私たち指導員ができることについて考え、日々の保護者との関わりから保護者支援・家庭支援について考えていく。

第一章 愛着障害とは（参考文献より抜粋）

人間が幸福に生きていくうえで、もっとも大切なものの一つは愛着である。愛着とは、人ととの絆を結ぶ能力であり、人格の最も土台の部分を形造っている。人はそれぞれ特有の愛着スタイルをもつていて、どういった愛着スタイルをもつかにより、対人関係や愛情生活だけでなく、仕事の仕方や人生に対する姿勢まで大きく左右されるのである。愛着の問題は特殊な家庭環境で育った子どもの問題だけでなく、近年では一般の子どもや大人にも広くみられる問題だと考えられるようになっている。

【愛着スタイルについて】

対人関係のパターンを支配し“感情”“認知”“行動”に影響する
= 愛着スタイル

	安定した愛着スタイル	不安定な愛着スタイル
対人関係	良好な対人関係に恵まれやすい 家庭生活での幸福、社会生活での成功 に関与	対人関係に過敏 対人関係が表面的で深まりにくい
行動	助けや慰めを求め、それを得ることができる。親しい人は自分を心配し助けてくれると信じている。	困っている事を打ち解けれず、親しい人に助けを求めても傷つけられると思っている。

どういった愛着が育まれるかは遺伝的要因にも勝る影響を一生に及ぼすのである。愛着スタイルは第二の遺伝子ともいえる。

【愛着スタイルとはどのように培われていくか？】

人は、生まれるとすぐに母親に抱きつき、つかまろうとする。逆にいえば、育っていくためには、つかまり、体に触れ、安らうことができる存在が必要なのである。よって、抱っこからすべては始まる。抱っこは、子どもの安心の原点であり、愛着もそこから育っていく。子どもからは母親に対する愛着が生まれ、母親から子どもに対する愛着も強化されていく。何らかの理由で、あまり抱っこをしなかった母親は、子どもに対する愛着が不安定になりやすく、子どもを見捨ててしまう危険が高くなる。

【抱っこの与える影響】

子どもが健全な成長を遂げるうえで非常に重要である。子どもに心理的影響・生理的な影響を及ぼす。抱っこは、スキンシップという面と「支え・守る」という面が合わさった行動である。その影響は、大人になってからも持続するほどである。

【特別に選ばれた存在との絆と愛着形成の時期】

スキンシップ以外にも、愛着が成立上で必要なもう一つの要素がある。それは、愛着の対象が選ばれた特別の存在であり、ある特定の存在に対する特別な結びつきをもち、見えない絆「愛着の絆」が形成されているのである。

多くの人が可愛がり、十分なスキンシップを与えても安定した愛着が育っていくことにはならない。多くの人が関わりすぎることは、逆に愛着の問題を助長してしまう。

新生児から、すでに愛着の形成は始まっているが、6か月くらいまであれば母親が他の人に変わっても、あまり大きな混乱は起きない。6か月を過ぎるころから、子どもは母親を見分けはじめ、人見知りが始まる。(=愛着が本格的に形成され始めたことを意味する)生後六か月から一歳半くらいまでが、愛着形成にとってもっとも重要な時期とされる。また愛着形成に大事なことは、十分なスキンシップとともに、母親が子供の要求を感じる感受性をもち、速やかに対応する応答性を備えることである。求めたら応えてくれるという関係が、愛着を育む上での基本なのである。

いったん愛着の絆がしっかりと形成されると、それは容易に消されることはない。また重要な特性は、半永久的な持続性である。しっかりと結ばれた愛着の絆は、どんなに遠くに離れても時間を隔てていても変わらずに維持される。

【愛着の傷が脅かす子どもの姿】

子どもが母親に助けを求めて、それに応えてくれなかつたり、その反応が不安定なものだと、愛着が不安定になり、基本的安心感や基本的信頼感というものもうまく育まれない。

愛着を脅かす、もっとも深刻な状況は、愛着対象者がいなくなる場合（死別や離別）がある。

■愛着対象者がいなくなった子どもの姿と段階

- ①抵抗・・・母親を求めて泣き叫び、悲しみと怒りを爆発させる。現実を受け入れることができず、それに抗議しようとする。
- ②絶望・・・意気消沈。無気力。無関心。食欲や睡眠も妨げられ、成長が止まってしまうこともある。
- ③脱愛着・・・愛着対象者の記憶は封印され、何事もなかったかのように落ち着いて生活する。生存のために、子どもは愛着対象者への愛着を切り捨てるというぎりぎりの選択をする。

もうひとつの深刻な状況は、守ってくれるはずの親から虐待を受け、安全が脅かされるという場合である。

■愛着対象者から虐待を受けた子どもの姿

- ・子どもは親を求めて、同時に恐れるというアンビバレントな状況。
- ・「自分は無力で悪い存在だ」という罪の意識や自己否定の気持ちをもつ。
- ・虐待をされても、子どもは親を愛し、求めようとする。
- ・親を責めず、自分を責める。⇒自分がダメな子だから親は愛してくれない

【安全基地と愛着行動】

愛着の絆が形成されると、子どもは母親ということに安心感をもつだけでなく、母親がそばにいなくても次第に安心していられるようになる。愛着のこうした働きを安全基地という。

■安全基地と子どもの姿

	安全基地が確保されている	安全基地として機能していない
行動	安心して外界を冒険しようと意欲をもつ。	子どもは安心して探索行動を行うことができない。
知的興味 対人	好奇心旺盛で活発的。 積極的。	無関心。 消極的。

■安全基地を確保している場合の成長・行動

	行動
1歳半	子どもは徐々に母親から離れて過ごせる。ストレスや脅威を感じると、母親のもとに避難し、体を触れ合せ抱っこしてもらうことで安全を確保し安心を得ようとする。
3歳ごろ	一定期間であれば母親から離れても、不安を感じることがない。 母親以外の人とも、適度に信頼して関わりをもつことができる。 母親を中心とする安全基地として確保しながら、他の従たる愛着対象や安全基地をもち、活動拠点を披露目始める。
大人	安定した愛着によって、安心感、安全感が守られている人は、仕事でも対人関係でも積極的に取り組むことができる。

■気をつけたいこと

過保護になってサポートを与え過ぎると、良い安全基地ではなくなる。安全基地とは、求めていないときにまで縛られる場所ではない。子どもを閉じ込める牢獄になってしまい、依存的で不安の強い自立できない子どもを育ててしまう。

■安全基地は、いざというときの避難場所

必要なときに助けを与えてくれるという安心感があれば、いつもそばにいなくてもよい。ストレスや不安が高まったときには「愛着行動」が活発になり、それが健全な状況であり自分を守るために重要なことである。

愛着行動には、直接的な行動（一緒にいようとする・体に触れる）と、精神的な活動（愛着対象者について考える・思い出す）がある。

【子どもの愛着パターン】

愛着が安全基地としてうまく機能しているか、ストレスに対してどういう愛着行動を示すかによって、子どもの愛着パターンは四つに分かれる。その四つを知っておくことは、大人の愛着スタイルを理解するうえでも非常に役立つ。子どもの愛着パターンを調べるのに、エインスワースが開発した新奇場面法（子どもと母親を離し、また再会させるという

場面を設定して、そのときの子どもの反応を観察する)を用いて愛着のパターンを分類する。

	安定型	回避型	抵抗／両価型	混乱型
母親から離された場合	泣き不安を示す。	ほとんど無反応。	激しくないで強い不安を示す。	回避型と抵抗型が入り混じった一貫性のない無秩序な行動パターンを示す。無反応であったり激しく泣いたり怒りを表す。親からの攻撃を恐れているような反応をみせたり、突然親を叩いたりすることもある。
母親と再会した場合	素直に喜び、母親に抱かれようとする。	目を合わせず、自ら抱かれようとしない。	母親が抱こうとしても拒んだり嫌がる。しかし、いったんくっつくと離れようとしない。	
ストレスに対しての愛着行動	適度な愛着行動を起こしている	愛着行動を起こさない	愛着行動が過剰に引き起こされている	
安全基地	母親がうまく機能	もたない	母親が十分に機能していない	危険な場所となり混乱を来している
割合(約)	6割強	1割5分～2割	1割	5分
環境・背景等の特徴		児童養護施設などで育った子どもに典型的にみられる。親の関心や世話が不足し放任。	親がかまう時と無関心な時の差が多い。神経質で厳しく過干渉な親の場合が多い。	虐待を受けている子や精神状態がひどく不安定な親の子どもにみられやすい。
その後		反抗や攻撃性の問題がみられやすい。	不安障害になるリスクが高い。いじめなどの被害に遭いやすい。	境界性パーソナリティ障害になるリスクが高い。
母親の子どもに対する関わり方		感受性や応答性が乏しい傾向。無関心で、あまりかまわない。	母親自身不安が強く、神経質。子どもに対して厳格、過干渉、甘やかす一方、思い通りにならないと突き放す態度をとる。子どもに良い子であることを探める傾向。	母親が精神的に不安定。虐待を行っている場合に認められやすい。

【愛着パターンから愛着スタイルへ】

幼いころの愛着スタイルは、まだ完全に確立したものではなく、相手によって愛着パターンが異なることが多いし、養育者が変わったり、同じ養育者でも子どもへの接し方が変わったりすることでも変化する。そのため、子どもの愛着傾向は、愛着パターンと呼び固定化したものではない。母親とは不安定な愛着パターンを示しても父親や祖父母とは安定した愛着パターンを示すこともある。両親と安定した愛着パターンをもつことができれば、安定した愛着スタイルが育くまれやすい。しかし、親との愛着が不安定な場合でも、それ以外の大人や年長者、仲間に対する愛着によって補われ、安定した愛着スタイルが育つこともある。

親をはじめ、子どもにとって重要な他者との間での愛着パターンが積み重ねられていくうちに、十代初めのころから、その人固有の愛着パターンが次第に明確になる。成人するころまでに、愛着スタイルとして確立されていく。遺伝的な気質とともに、パーソナリティの土台となる部分を作り、生き方を気づかないとところで支配しているのが愛着スタイルである。また、恒常性をもち、七～八割の人で生涯にわたり持続し、遺伝的天性とともに第二の天性として刻み込まれるのである。後天的な環境の産物であることを考えると重要である。なぜならば、遺伝的天性はかえることはできないとしても、愛着という後天的天性を守ることは可能だからである。

【反応性愛着障害と不安型愛着障害】

誰にも愛着を求めようとしない場合も、誰にでも愛着を求めようとする場合も、愛着の形成に躊躇している。虐待・ネグレクト・養育者の頻繁な交代により、特定の人への愛着が損なわれた状態を反応性愛着障害と呼ぶ。反応性愛着障害は、抑制性愛着障害と脱抑制性愛着障害の二つに分かれる。

■抑制性愛着障害

誰にも愛着せず警戒心の強いタイプ。ごく幼いころに養育放棄や虐待を受けたケースに認められやすく、重度のものでは自閉症スペクトラムと見分けがつきにくい場合もある。

■脱抑制性愛着障害

不安定な養育者からの気まぐれな虐待や、養育者の交替により愛着不安が強まったケースにみられやすく、多動や衝動性が目立ち、ADHDと診断されることもある。

実の親のもとで育てられている子どもでも愛着の問題が認められ、三分の一の子どもが不安定型の愛着を示し、重度ではないが愛着に問題を抱えた子どもが、かなりの割合で存在することになる。（＝愛着障害）愛着の問題は、一般の子どもから大人にも広くあてはまる問題であり、一見問題なく暮らしている人においても、その対人関係や生き方の特性を、もっとも根柢の部分で支配しているのである

■増加する愛着障害

- ・子どもの数が減り、一人ひとりの子どもが手厚く大切に育てられているはずの現代において、愛着の問題を抱えた子どもや大人が増えている理由には、子育てに困難を感じる親が増え、虐待や育児放棄が社会問題化していることである。

子育ての困難＝子どもが育つことの困難

- ・愛着の問題は、愛着スタイルが確立するとともに、自立への圧力が高まる青少年期以降にさまざまなトラブルとなって現れ始める。大人にひそむ愛着障害の増加を間接的に示しているのは、「境界線パーソナリティ障害の増加」「依存症や過食症の増加」である。

⇒愛着不安の強いタイプの愛着障害

- ・淡白な対人関係を好む「草食系男子」や結婚になかなか踏み切れない人の増加
⇒愛着回避の傾向を示す愛着障害

■愛着障害を生み出す要因は何か

- ・七～八割が養育などの環境的要因により、残りの二～三割が遺伝的要因によると考えられている。
- ・愛着スタイルについては、遺伝的要素よりも養育者を含む養育環境の影響が大きく、しかも生涯にわたってその影響が持続する。
- ・親の不在。（戦争孤児、死別、生後半年から五歳の期間に母子分離等）
- ・過保護に育てられる。
- ・複数の養育者が関わる。（特定した安全基地が必要）
- ・養育者の交替。

※施設に預けられている子どもの場合は、絶えず養育者が交替するという状況にさらされる。できるだけ同じ職員との関係を持続的なものにするように気を配らないと、脱愛着がどんどん進んでいき、誰に対しても信頼や愛情を抱きにくい人間にしてしまう危険がある。

- ・親の愛着スタイルが子どもに伝達されやすい。

※親が不安定型の愛着スタイルをもっていても、出会う人との関係によって修飾や修正を受け、十代初めごろに愛着スタイルとして固定していく。

- ・親から否定的な扱いや評価を受けて育つ。
- ・母親がうつや境界線パーソナリティ障害、双極性障害、アルコール・薬物依存症、統合失調症などの精神疾患。
- ・母親の産後うつ。（出産前後にうつを経験する女性は三割程度）

■母親以外との関係も重要

- ・母親がいなくても安定して成長する子どももいる。

※親以外にも関わり見守る人間はもっとたくさんいるので、愛着関係をしっかりとつことができれば悪影響を免れることも可能である。

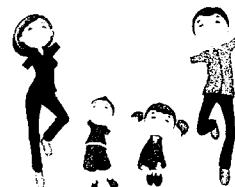
- ・両親以外にも、祖父母や兄弟、身近で親しんでいた遊び友達や親戚、教師との関係によって、周囲で育った子どもは安定した愛着スタイルが確立する。

- ・恋愛や結婚によってパートナーとなる存在と親密な関係を結ぶようになり、最も大きな変化が起きやすい。

第二章 愛着障害～事例検討から見えてきたもの～



私達は、日々子ども・保護者と関わる中で、双方（子どもと保護者）の思いが行き違つていて、悩んでいる事も多い事く、子どもの抱えている課題（学習面、情緒面、人間関係など）はどこからくるのだろう、という事を考えた時に、家庭背景や、子どもの立場で考えることが多かった。しかし、研究会で「何を学びたいか？」という所で、保護者にスポットライトを当てて考えると、『愛着障がい』という言葉が出てきた。この『愛着障がい』の話しを聞くと、今自分の関わっている利用者は、この愛着障がいに悩んでいる人が多いのでは？と感じ、保護者の立場からも考えるきっかけとなった。そして、学びを深める中で、児童館に通う子どもたち・その保護者の中で、指導員が関わりが難しいと感じた家庭について、『愛着障がい』を念頭に置き、ケース検討を行った。ケース検討では、子どもの姿・保護者の姿を共有し、色々なケースを分析する事により、新たな視点を見いだせるのではないかと、下記の事例検討に至った。



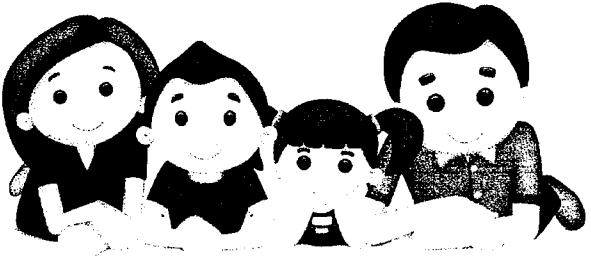
【指導員①事例】

子どもに対し、期待が大きく思いの強い保護者との関わりで、子どもは自分の意見を言えなくなってしまったり、どうせ怒られる、褒められたいけれど…、と自分の言葉で気持ちを伝えることや、認められるという事を諦めてしまっている子どもの姿があった。

私自身のこれまでの関わりとしては、子どもに対しては、ゆっくりと話せる、話しやすい空間を心掛けたり、遊びの中で認められる経験ができるように意識しているが、気持ちを言えず黙り込んでしまったり、友だちに対して当たりがきつく、トラブルも多くなってしまう。認められる経験というところも難しく感じている。

保護者には、子どもの姿を返し、コミュニケーションをはかるが、上手くいかず、また私自身がその保護者に対し苦手意識があった。

意見交換をする中で、なぜ保護者は思いが強いのか？指導員が苦手意識があることは伝わってしまっている？子どもにとっての安全基地となる人は誰なのか？また、母の安全基地はあるのだろうか？保護者のしんどさはどこからくるのだろうか？という意見があった。指導員の中では、日々の関わりの多い子どものことばかり考え、保護者には苦手意識からか、保護者の立場からの目線では振り返りが足りていないことに改めて気付いた。



【指導員①考察】

保護者・子どもともに不安型の傾向（相手の欠点や失敗に対し、容赦なく責め立てる・不満や苦痛といったネガティブな感情が燃え広がりやすい・相手が自分のことをおろそかにしているという被害感を持つ、等）がある。さらに子どもは両価的な気持ち（求める気持ちと拒絶する気持ち）を持っていると予想できる。これは、普段の親子の様子をみると、子どもが頑張ったことに対し、保護者が期待が大きく、保護者の思っているレベルに達していないと怒られる、否定されてしまう、というような事の繰り返しで抱いた両価的な気持ちだと感じた。また母自身の生育歴もわかる範囲でみると、不安型の傾向の経験が多いと感じ、母自身の安全基地がなく、それが子どもの姿にも影響しているのではないかと思う。

【指導員①まとめ】

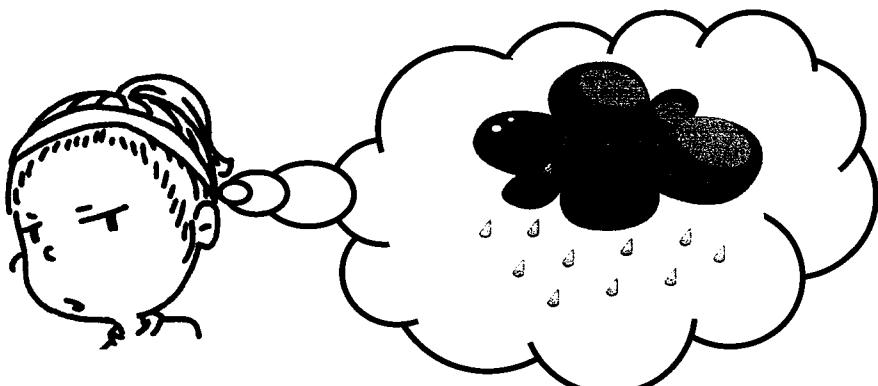
このケース検討をしてみて、自分では見えなかった・考えられなかった視点に新たに気付くことができた。私たち指導員にできることは限られているが、研究会で学んだことを保護者・子ども・両者を取り巻く家族に少しでも伝え、保護者の安全基地ができるようにしたり、児童館で遊びや活動の中から子どもの満たされない気持ちを少しでも満たし、その姿を保護者に返す、という出来ることからしていきたいと思った。



【指導員②事例】

家庭事情により、家では独り、または兄弟と二人だけで過ごすことが多い。遠足などのイベントには参加はするが、遅刻が多く、その原因として考えられるのは、保護者が子どもを起こさないまま仕事へ行ってしまっていることと考えられる。また、普段の会話の中で保護者の話はあまり出ない。運動会でも、子どもに活躍の場があったが、保護者の姿はなかった。

そんな中、園外でトラブルを起こした。その後、保護者に事態の経緯を報告するため、子ども、保護者、指導員による三者面談を行った。その際保護者は、「子どもの嘘には気付かず、子どもの言うことを鵜呑みにしていた」と話していたが、それは『子どもを信用していた』というよりは、『子どもの話を聞くのが面倒くさいので、特に関心を持っていなかった』と言っているように感じた。



【指導員②考察】

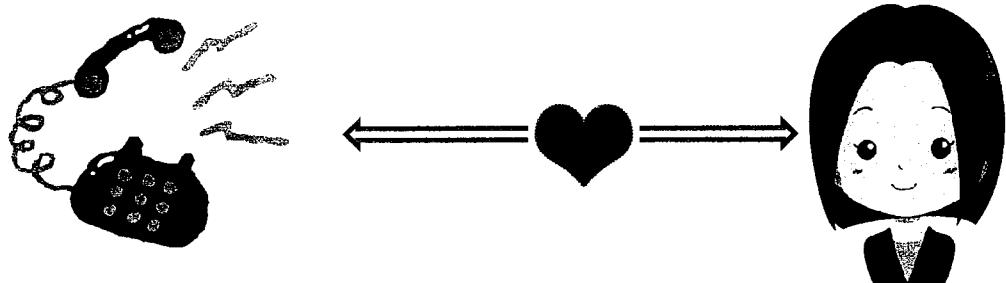
子どもはなぜトラブルをおこしたのか。まだまだ保護者に愛情を強く求める年齢ながら、普段から接する機会が少なく、また、イベント等にも参加してもらえなかつたことから、自分に関心を持って欲しかったのではないだろうか。そのため、保護者への試し行動をしたのではないかと考えられる。

保護者はなぜ子どものトラブルに気付かなかつたのか。薄々は気付いていたがめんどうくさいことに巻き込まれたくない為、あえて追求しなかつたのではないだろうか。そのため、子どもに対して、『守る』というより、関わりたくないという気持ちが強かったのではないかと考えられる。

このことから、愛着障がいのタイプに当てはめてみると、周りを避け、指導員との連絡も途絶えているため、回避型の傾向（人と親密になるのを避けてしまう・一人の方が気楽・失敗や傷つくのを恐れのあることを極力避けようとし、人生が小さく萎みがちになりやすい・実力以下の人生に甘んじてしまう、等）があるのではないか。

【指導員②まとめ】

今まで保護者との連絡は、何か連絡事項があったときや、子どもの体調不良等でどうしても迎えにきてもらわなければならぬときにしかせず、必要なことのみ伝えている。（上記にもあるが、連絡が途絶えているため、留守番電話にいれている）しかし、今回のケース検討を通して、保護者に伝える際、気遣いの言葉や、普段の子どもの様子も伝え、『自分のことを心配してくれている』『子どものことを見てくれている人がいる』という感情を持つてもらえるような働きかけが必要だと感じた。自施設で上記にあげたことを実施し、保護者が前向きになってもらえるよう、心掛けていきたい。



【指導員③事例】

他児との関わりの中でトラブルが発生した際は、暴言を吐きながら泣き叫び、部屋の隅でうすくまつて拗ねるといった傾向がある。その時になにがあったかを聞いても聞き入れられない姿があるので、指導員が様子を見て本児の気持ちが落ちついた後に話を聞くが、自分の気持ちが言えず黙り込む、何に対して怒っていたのか分からぬことがある。一对一になってゆっくりと時間をとり、本児の気持ちを代弁しながら問い合わせると頷いて答える場合もある。



【指導員③考察】

本児は自分の気持ちを相手に伝えること、気持ちを上手く表現することが難しいのではないか。生活面や学習面から見て家庭内での本児の様子を考えると、子どもの家と同様に保護者に対して気持ちを伝えられない可能性があると考えた。事例に挙げたような泣き方をするのは、そこまでの泣き方をしないと保護者に聞き入れてもらえない、関心をもってもらえない為、大人の気を引くための行動なのではないかと考える。以上の点から保護者と本児の愛着関係は薄いのではないか、と予想する。

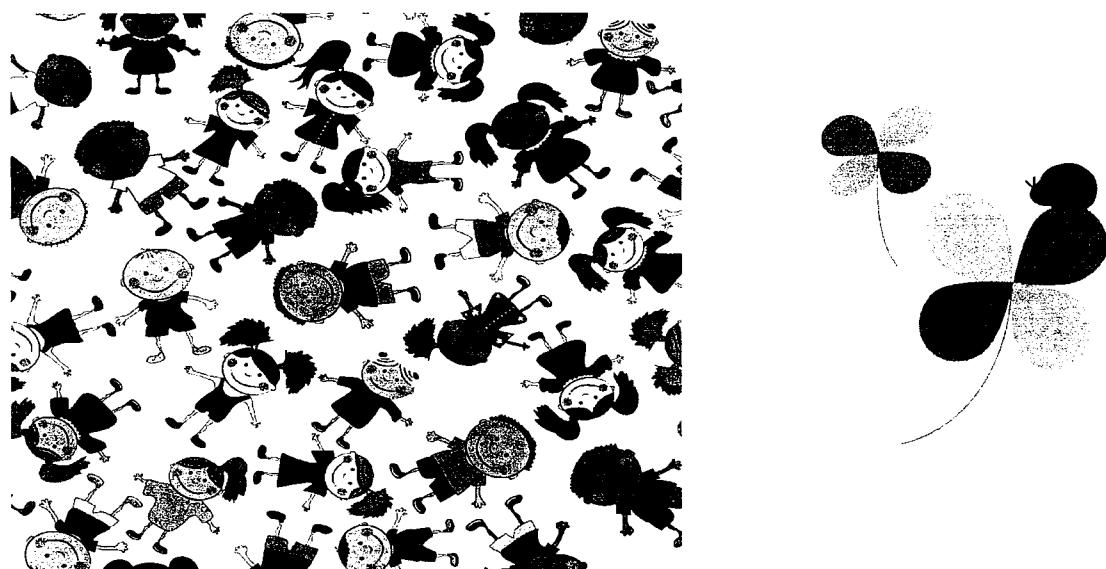
【指導員③まとめ】

意見交換をする中で保護者の目線での気づきがあった。
保護者の子育ての知識の乏しさが一つの原因だと考えられるため、保護者へのアプローチが必要と考えた。また、保護者が子育てや本児に対して興味が薄いことも考えられるため回避性の愛着障がいのタイプではないだろうかと予想する。

私たち指導員に出来る事は、保護者が何に困っているのか、何を必要としているのかを保護者と関わる中で掴んでいく。そして、生活面や学習面で本児にとって最低限必要なことを保護者に知らせていく事である。しかし、指導員と保護者との関係が希薄な状態では声を掛け続けても本児にとっても保護者にとっても負担になり兼ねないので保護者と関わる時間のあるお迎え時に、積極的に会話をする機会を増やし保護者との関わりを深めることから取り組んでいきたい。

本児に対しては自分の気持ちを表現し相手に伝えることができるよう、今まで以上に日常生活の中で会話をし、自分の気持ちを表現する機会を増やしていきたい。

上記のように、事例検討をする事で改めて一つひとつの家庭について向き合い、振り返り、考えることができた。色々な施設が集まるこの研究会で意見交換ができるることは、様々な視点から各家庭を、支援の方法を見つめ直す事ができたのではないかと思う。そして、この事例検討をきっかけに私達にできることもある、と小さなことでも出来ることから取り組み、子ども達にとってより良い未来に繋いでいけたらと思う。



【保護者との関わりで指導員ができること】

保育にしても学童にしても、保護者との関わりは大事である。人間だから相性もあるが、それでも関わる事をやめることはできない。今回、愛着障害のことを調べ話し合う中でも、保護者とどのようにして関わっていくか、その難しさが話にでた。

ある著書には『なにもすることができない』というような一文があった。だからといって、子どもの事やその後の保護者の事を考えると諦めるわけにはいかない。メンバーで事例を出し合い対応方法を考えるが、大体が『こちらから歩み寄る』といったものになった。その中で様々な方法を出し合うこととなった。妥協するわけではなく、また言いなりになるわけでもない。一定の距離はもちらながらも保護者と関わり続けて、信頼を得ていくことが、話し合いをしていくうえで大事なことである。信頼がない状態で本題の話をしても聞いてもらうことはできない。

そうなると、指導員一人の問題では無くなっていく。施設全体で関わり、クラスが変わったから関係はおしまい、となればそれこそ信頼なんて生まれないだろう。施設全体で関わり、担任がかわる時に引き継ぎなどしっかりしていく事が必要だと感じる。保護者からしてみれば変わったばかりの担任に相談などしにくいだろう。しかし、関わった1人1人が関係を続けていけば保護者の頼れる場所が増えていき、それが子どもの安心した居場所づくりに繋がっていく事だと思いました。

気になる子どもがいたとして、その気になる点を保護者の方に持ち掛けるのは大変気を使う。そのまま一緒に考えてくれる方。『そんな事ありません』とつっぱねる方。反応も様々だろう。しかし、どういう反応だったとしても保護者との関わりは重要であり、続けていかなければならない。

また今回の愛着障害など、たくさんの事例がある。たくさんの事例をみんなで共有し、知識を深めることも大事だと感じた。『なにもすることができない』からといってなにもしないでいい理由にはならない。

たくさんの事を共有して、前に進んでいきたいと思った。

地域の子どもたちの放課後と関わる指導員の役割

研究活動メンバー

大山彬子(長居子どもの家)
多賀井潤一郎(今池子どもの家)・大西奈々子(望之門学童クラブ)・隈元まひる(育徳園子どもの家)・
藤田凪紗(平和の子子どもの家)・丸谷美香(四貫島友隣館子どもの家)・川畠亮輔(長居子どもの家)

テーマに至った経緯について

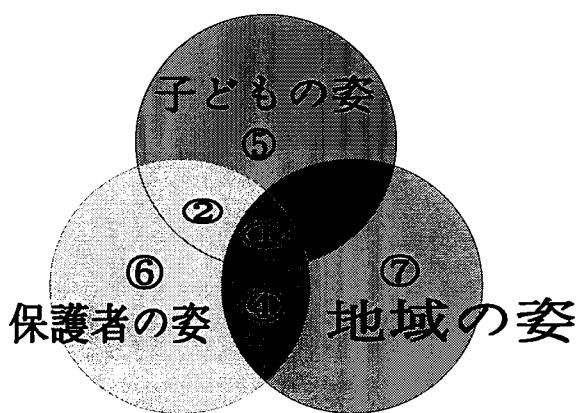
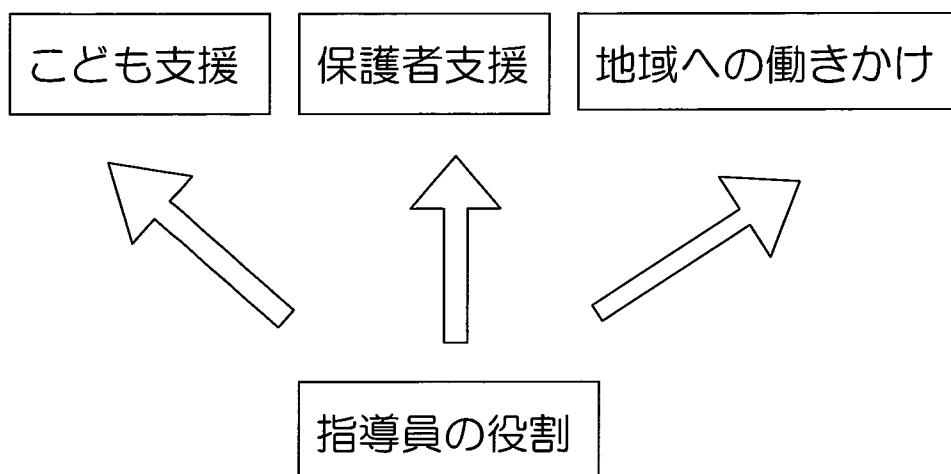
現在、12施設が地域の子ども研究会に参加している。子どもたちの放課後を担う役割は同じであるが、どこの施設を見比べてもそれぞれ活動内容や子どもたちを育む手法が違っている。更に言えば施設内でも個々の違いがあり、指導員一人一人の子どもたちへの関わり方・声のかけ方や保護者対応なども違っているだろう。それは経験年数によっても顕著に違いが出ていると思う。

しかし地域の子ども研究会年間テーマを【地域の子どもたちの豊かな生活・成長を目指して】と掲げ、参加するスタッフとして“子どもたちの豊か”を目指す思いは、経験年数や勤務施設を越えて、共に目指し、共有していきたい“思い”である。また自施設の職員へ、そして今後研究会スタッフとして参加する次世代の指導員の方へ、子どもたちへの“思い”が伝わる事を願って、研究活動内容を『放課後施設の役割・次世代へ継承していきたい事』を文章化、更に『指導員の持つべき知識・技術』を再確認しながら上記2点を施設に返し、補いたい（必要と認められる）知識を研修活動へ繋げていく事をねらいにテーマを【地域の子どもたちの放課後と関わる指導員の役割】と設定した。

第一章

指導員の役割

子ども支援（遊び・成長過程の把握）・ 保護者支援・地域への働きかけ（学校や関係機関との連携）大きく3つに分けられる。しかし大きな3本を残したいのではなく次世代に向け残したいものは丁寧な関わりと知識が詰まった資料である。このため3つをより細かくしていくよりも『より良い子どもの放課後』を考えるためには『どういった環境』『指導員の関わり』が必要か考えていく。



- ① 理想の放課後の状態
- ② 保護者から見守られているが地域との繋がりが無く、環境が整わない状態
- ③ 子どもを見守る地域での環境があり人材があるが、保護者がこどもを受け入れられない状態（虐待や親の就労問題・精神疾患）
- ④ 保護者・地域環境に課題はないが子どもが拒否する場合（非行などのケース）
- ⑤ 子どもが孤立している状態。保護者からの見守りもなく、地域での支えも得られない状態
- ⑥ 保護者のみ子どもの問題に心血を注ぎ、しかし地域の支えもない状態
- ⑦ 地域の環境のみある状態

① 理想の放課後の状態

保護者が自宅にいるケース	保護者が就労しているケース
安心して過ごす居場所（自宅・保護者）があり、その事での安心感を得る。	自宅の代わりとなる安心できる居場所がある。そこに信頼を寄せる大人がいる。
近くに同学年・異学年の友だちがあり、共に遊べる場所（公園や公共施設）がある。 地域で遊ぶ子どもたちの姿を見守ってくれる地域住民がいる。	
上級生から下級生へ良き遊びの継承があり、地域でのルールを子どもたちが共通認識・継承出来ている。	
遊びを創造・発展させる力があり、その時に応じてルールを変える柔軟さがある。	
自身を肯定的に捉え、挫折の経験を見守る保護者の姿がある。それを得て自身に返す。	
自身の痛み・他児の痛みが分かり思いやるきもちがある。	

② 保護者から見守られているが地域との繋がりが無く環境が整わない状態

予想される状態	改善したい姿
自転車や車の往来が激しく危険な環境	登校時や放課後の時間帯に車両通行禁止に
自由に遊ぶ公園や公共施設が無い（少ない）	児童遊園等の設置
危険を察知した際に助けを求められる地域住民がない（子どもたちが認識していない）。地域住民の子どもたちを見守る意識がない（低い）	地域住民の見守り強化
指導員・施設の役割（知識）	
地域住民へ子どもたちの見守る意識を持ってもらう様機会を設ける	
児童遊園の設置や車両通行禁止に向けて地域住民と共に市へ訴えていく。	
保護者と地域住民との橋渡しをする（イベントの実施など）	

③ 子どもを見守る地域での環境があり、人材がいるが保護者が子どもを受け入れられない状態

予想される状態	改善したい点
虐待を受けている	保護者と子どもが健全な関係になる。
子どもに対して無関心	保護者の精神疾患・就労問題の改善
保護者の低年齢化	生活習慣を身に付ける。
保護者の精神疾患	危機意識向上
就労できない・もしくは勤務時間により子どもとの時間が取れない	子どもの状態を受け入れる
指導員・施設の役割	
児童相談所と連携	・他機関の紹介や仲介
保護者との連絡を密にとり、信頼関係を築く	・施設、職員間での情報共有
子どもの安心できる居場所作り	・保護者同士の交流の場の提供、紹介、仲介
生活習慣を身につけるべく生活体験を活動に取り入れる	
危機意識を向上させるよう努める。	

④ 保護者・地域環境に課題はないが子どもが拒否する場合

予想される状態	改善したい点
子どもが非行に走る状態	子どもが安全な場所を居場所に求める
子どもの思いと保護者の考えとが一致せず子どもが受け止められないと感じている	保護者と子どもとが意思疎通し、子どもが安心して保護者に甘えられる状態
子どもの求めているものと地域環境が一致せず子どもの居場所がないと感じている	地域の施設や人たちに見守られ、居場所を持つことができる
指導員・施設の役割	
子どもと保護者とが意思疎通できるよう両者の仲立ちとなり話を聞ける立場となる。	
保護者や地域の中で子ども自身が安全な居場所となるよう話しつなぐ役割となる。	

⑤ 子どもが孤立している状態。保護者からの見守りもなく地域からの支えも得られない状態

予想される状態	改善したい点
信頼できる大人が居ない	周りの大人の子どもへの意識
何も知らない状態	
何にも属していない	
非行	
居場所がない	
指導員・施設の役割	
自己肯定感を持てるように働きかける	
指導員が信頼される大人になる	

⑥ 保護者のみ困っている状態

予想される状態	改善したい点
保護者の孤立	保護者同士のつながり
地域のサポート体制が期待できない	生活上の負担
身近に相談できる人がいない	子育ての悩み
指導員・施設の役割	
保護者同士をつなぐ場の設定（イベント開催、地域イベントへの参加など）	
保護者の悩みを相談できる場の設定（保護者懇談会、個別相談など）	
保護者のコミュニケーション能力の見極め（精神疾患、外国籍、就労状況、身体的ハンディ、ライフスタイルなど）	
他機関との連携（児童委員、保健師、主治医、学校など）	

⑦ 地域の環境のみある状態

予想される状態	改善したい点
地域は見守ろうとするが、子どもの求めているものと一致しない。 居場所をつくっても集まらない。 地域の環境と保護者の思いが一致しない。 地域の環境が子ども・保護者それぞれと合わず、地域としてどうするか方向がみえない状態。	地域の環境と子ども・保護者の思いがつながり、居場所ができる。
指導員・施設の役割	
地域環境づくりを進める中で、子ども・保護者の思いと地域の人たちの思いを伝えつなげていく立場となる。	

上記の資料を基に意見を出し合った。その結果、

- ・ 保護者との関係性、地域との関わりを掘り下げれば、もう少し必要な部分も見えてくるのではないか？
- ・ 指導員が代われば、視点も変わり必要な情報もプラスされるのではないか？
- ・ 『予想される状態』『改善したい点』『指導員・施設の役割』に分けることで、地域福祉施設の指導員としての役割がわかりやすくなかった。など、意見があげられた。

私たち指導員は地域の子どもと関わる上で、その時代の子どもたち・保護者・地域のニーズに即した働きかけや関わり方が求められている。昔と今の子どもたちの『遊びや環境』に焦点を当ててみても、実情が違ってきている。ゆくゆくは今と未来の子どもたちの姿も変化していくだろう。だからこそ子どもたちに対して私たち指導員がより良い関わりをしていくために、地域の子どもたちの実情を把握し、ニーズに合わせて柔軟に対応できるよう様々な知識を得ておく必要がある。その一つとして施設に通ってくる子どもたちだけでなく地域で過ごす子どもたちにも目を向けられるよう、地域に出向く機会を“地域課題との出会い”と捉え発掘・発信し、課題が資源となるよう支援していく役割がある。

第二章

現状の自施設の状況から聞き取り調査～目的・実施に向けて～

理想の放課後を目指し、自施設に通う子どもたちの放課後の安全保障・保護者の就労支援と共に、より良い環境・育ちを目指し取り組んでいる。しかし(放課後を施設ではなく地域で過ごす)地域の子どもたちを、施設状況や制度の問題・安全保障が十分に行えない等様々な実情から、容易に施設内に子どもたちを招き入れる事が出来ず、地域で過ごす子どもたちの現状を把握できていない。

そこで、子どもたちの放課後の仮説(施設に来ていない)をたて、学童に来ていない子どもたちは「放課後【どこで】【何を】【誰と】過ごしているのか、そこに見守っている大人の存在があるか」を調査、そこから見えてくる“理想の地域環境”を考え“施設職員ができる事”“必要な知識”を打ち出す。

※今回の調査は(高学年時期になると行動範囲が広がり、子どもたちの世界に広がりが出るだろうとの予測から)主に高学年児(およそ3年生くらい)を中心に聞き取り調査を実施した。一部の地域のごく少数からの聞き取り調査の為、結果が子どもたちの放課後の実態の把握に繋がるものではない。

◎ 調査結果

【自宅で過ごす】と答えた子どもたちの大半は、1人もしくは兄弟と共に宿題・ゲーム・テレビを見て過ごしているようである。友だちを招く・招かれる場合は自宅に保護者がいる時だけという様に家庭でのルールを設けているケースが多く、それを守っていることが分かる。

放課後を【習い事】をして過ごしている子もあり、公文・塾やサッカー、体操など様々な過ごし方がある様子。その場には習い事のコーチや先生がいるようだが、それ以外の時間帯（道中等）に大人の存在があるかは不明であった。

今回“過ごす場所”の半数を占めたのが【公園・自宅（友人宅）前】であった。（聞き取り調査時期が“夏～秋にかけて”であり「自宅」よりも「公園」が多く占めたのではと思われる）公園・自宅前と答えた子のほとんどが“1人”ではなく“友人数名と”過ごすといった回答であった。公園には近隣の方（近所のおじいちゃん）がいる事もあるようだが「いない・わからない」と答えた子が多く子どもたちがあまり大人の目を意識していないことが分かった。公園で過ごす中の約半数は「ゲームをして」であった。ゲーム以外の回答では鬼ごっこ・秘密基地作り・キックボードなどが多く、ボールを使うサッカーやドッジボール・キャッチボールはごく少数となっており、“校庭でボールをしてから公園でゲーム”という回答もあった。

聞き取りからの考察

多くの子どもたちが友だちとゲームをして過ごすと答えた。子どもたちの遊びの広がり・そこから深まる交友関係を考えた際、言葉を交わし時には衝突し、妥協点を見出していく工程が必要である。果たして“ゲーム”というツールでそれが可能だろうか？しかし公園ではボールを使った遊びが出来ない現状が見え、実際自施設の周辺を見てもボール遊び禁止となっている公園も少なくない。現在の地域での公園の役割と子どもたちの意思を把握し、地域資源を柔軟に活かす方法を考える事も子どもたちが豊かに放課後を過ごす居場所作りにつながるのでは？と考える。

大人の目【見守り】という点では、習い事（その場）では教える講師がいるであろう。公園や友人宅（前）で過ごす子どもたちも、友だちと過ごしている子が多い。近隣の方がいる公園もあり、全く大人の目が無いという事では無かった。

しかし習い事の道中・公園からの帰り道はどうだろうか？1人になってしまう子どもの実態があるのではないか？

更に子どもたちの聞き取りの中で“大人の存在”を聞いた際『どうだったかな？』と考えるしさの子、不明と答えるなど子どもたちにとっての放課後に大人の存在（見守り）は重要視されていない様子であった。

近年の子どもたちが巻き込まれるトラブルにおいて、大人の（地域の方の）見守りがあれば防げた事件があり地域の方の見守り強化・意識改革も必要であろう。

福祉施設職員として地域へ子どもたちの見守りを訴えていく事が必要ではないか？子どもたちは、何かトラブルに巻き込まれた際にはどこに助けを求めたらいいか？地震が起った際・（友人・自身が）事故にあった際どういう行動を取ればよいか？等を伝え、子どもたち自身が危機意識を持てる様工夫が必要である。

その為に施設職員として様々な危険を知り、より地域を知り、情報をつかみ、危険個所を把握する事や、地域の方と連携できる関係作り、地域の子どもたちとの接点を増やす事など、様々な方法で地域の子どもたちの放課後に関わり豊かになるよう意識して過ごしていく事ができると考える。

まとめ

本研究活動内で「地域の子どもたちと関わる指導員の役割」として地域の子どもたちの理想の環境とは何か?またそれが揃わない(環境が整わない)理由はどこにあるのか?など思いつくままに討議した。その中では地域環境に理由があるケースや保護者に疾患のあるケースなど様々な課題があり、どこにどういった手が差し伸べられ子どもが・保護者がより豊かに近づけるのかを検討していった。しかしどのケースも一つの手があれば改善…といったものではなく複合的に、専門的に手をさしのべる必要性が見え、福祉施設の指導員一人で担うことではなく、地域資源を知り、専門機関へ繋いでいく事も役割の一つと再認識した。

更に、『地域の』子どもたち(放課後施設へ通わない子ども)の放課後を把握出来きていない現状に、年間テーマ・研究会テーマに添って子どもたちにどんなことが出来るか・何が必要かを考える機会となり、聞き取り調査を行った。調査において気になった点は地域の子どもたち(ここでは放課後施設に通っていない子とする)の危機意識の低さであった。しかし自施設に通う子どもたちを見ても危機意識が高いとは言えない。ただ自施設に通う子どもたちは(登所道中は子どもたちだけになるものの)施設内では常に大人の目があり危険から守られ、害が及ぼうとするとそれを見守り教えてくれる存在がいる。反面地域の子どもたちは子どもたちだけで過ごす場面が多く、周りに見守ってくれる大人の存在が無いのではないか?困った時・何かトラブルに巻き込まれそうになった時、どこに・誰に助けを求めたらいいかを子どもたち自身で考え行動しなければならない。そういう環境から地域の子どもたち自身が危機意識を持つ事の重要性が考えられる。

上記は子どもたちの地域環境について触れたが、内面的な成長を考えると常に大人の目にさらされて過ごす事よりも、大人の目から隠れて子どもたちだけの世界をつくり、そこで様々な経験をすることも成長に必要である。

では、地域の子どもたちに地域にある福祉施設の指導員として何ができるだろうか?

1つは施設に通う子どもたちと共に地域に出向き、地域実態を把握・地域の課題を知り子どもたちと関わりを持ち、その中で子どもたち自身の危機意識を高めることができるのでないか。また私たちが地域に出向くことで、地域の中での“子どもたちの安全な居場所”が、子どもたちが“豊かに過ごす場所”となっているか見つめなおす機会となり、そこが“安全”で“豊かに”過ごす事が難しいのであれば、次にどんな事が出来るかを考えていく一歩となる。

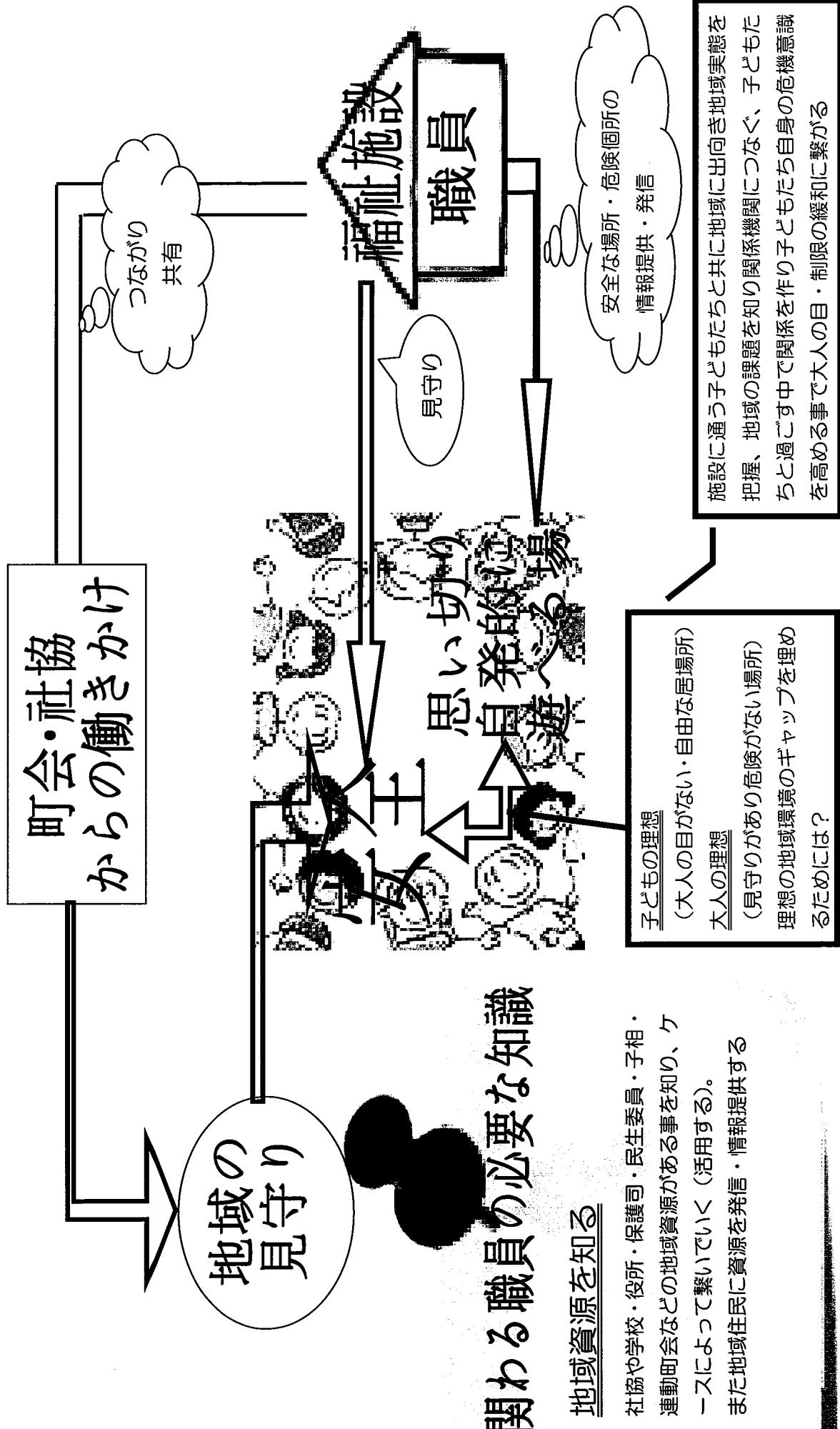
子どもたちの・保護者の方の・地域の方の安全、豊かという役割を目指すのは、地域福祉施設の指導員だけでは限界がある。

しかしまず私たち指導員が地域の子どもたちと関わる中で課題を発掘し、様々な場の情報交換や施設の行事を利用して沢山の方に知ってもらう事が出来る。この役割を果たすことが新たな一步となり、ゆくゆくは地域の子どもたちの“安全”を守り“豊か”に繋がるのではないだろうか?

地域で過ごす中で課題発掘の意識を持ち、新たな一歩を踏み出す意識で過ごし、少しずつ子どもたちの・保護者の方の・地域の方の豊かにつながるよう考えていきたいと思う。

研究活動テーマ：地域の子どもたちの放課後と関わる指導員の役割

私たちが考える、地域の子どもたちの理想の放課後と地域で共に過ごす福祉施設（職員）の役割・出来る事とは



子どもたちとの活動の歴史

- 第29回ともだちドッジボール大会
- 第44回ともだち運動会
- 第19回子ども将棋大会
- 春のあそび王国
- 第63回大阪市子ども卓球大会
- 自然体験活動 ワークキャンプ
- 自然体験施設応援バザーと中高生 OBOG 活動

第29回ドッジボール大会

文責：阿さひつくし会
吉野 裕志

開催日時：2014年5月24日（土） 9時30分～15時30分

会 場：大阪市立 長居小学校校庭

参加人数および参加施設：

	愛染橋	阿さひ	育徳	今池	今川	長居	望之門	都島	平和の子	合計
1年	10	5	14	1	6	8	10	8	11	73
2年	7	6	17	0	5	6	12	10	6	69
3, 4年	7	12	25	6	0	11	10	21	8	100
5, 6年	9	5	17	3	10	11	8	3	0	66
計	33	28	73	10	21	36	40	41	25	307

昨年度の引き継ぎから対策を考え研究会内で共有する。職員の入れ替わりがあり、引き継ぎが上手くいっていない場合もあったが、共有作業を徹底する。あがっていた課題と対策は以下の通り。

- 引率職員によるコートの場所の把握方法 → 自施設で打ち合わせをしっかりする
- 応援場所や観覧場所について → 声かけ続け、注意する。
- 遊具で遊ぶ児童について → 声かけ以外にひもで結ぶなどの対策をする。
- 午前の部の賞状について → 閉会式でわたす
- 応援マナー やたばこのポイ捨てについて → 各施設から保護者で見回り係を作る。

また、長居公園のイベントや、土曜授業が複数施設かぶってしまうなど、不確定要素が多くかった。しかし一つ一つみんなで対策を考え意見を出し合って向かい合った。

今年度から見えてきた課題もあったが、それらも研究会スタッフ一同で共有することにより来年度からの大会運営にいかせていくように、振り返りをする。

大会当日はたくさんのボランティアスタッフや学生ボランティアの協力があり、運営できた。研究会スタッフだけでは難しいことも、たくさんの協力があったおかげで無事に終わらせることができました。



【2015年度に向けて】

土曜授業がある中、複数施設が一度に集まることは困難になってきた。しかし、みんなで集まりたいという思いが強く、ともだち運動会同様、日曜開催の意見ができる。

各施設それぞれ事情もあるが、施設間交流や中高生の活躍する場として、この大会を大事にし続けていきたい。そのためには各施設の協力が不可欠である。

ご協力よろしくお願いします。

THE Daichikyo SURVIVAL 2014

~第44回 ともだち運動会~

文責：望之門学童クラブ

大西 奈々子

【日 時】 2014年11月2日（日）9:30～12:30

【会 場】 都島中央公園グラウンド

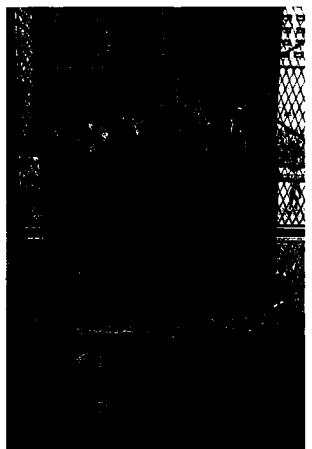
【参加施設】 10施設

愛染橋児童館学童クラブ・阿さひ保育園つくし会・育徳園子どもの家・今池子どもの家・今川学園子どもの家・長居子どもの家・望之門学童クラブ・都島児童館・やまと保育園子どもの家

【参加人数】 646名（うち小学生311名）

第44回を迎えたともだち運動会。数を重ねる中で
その時々の時代背景や環境、スタッフの思いや子
どもたちの個性に合わせて様々な形となって変化して
きた運動会、第44回の特徴を挙げるならば大きく
2つがある。

まず1つ目は“日曜開催”。大阪市内の小学校土曜



日授業が開始・増加の見込みにより昨年度より検討された結果、第44回は日曜開催で行われた。
そしてもう1つは数施設合同・4軍対抗での運動会の実施である。今までの各施設での取り組み（大
縄やりレー）は大切に残しつつ、当日楽しめる競技は同軍の施設の子と協力して参加し、より他施
設の友だちを近く感じられるように取り組んだ

当日までの準備は日曜開催の影響で道具を提供して頂いている施設との打ち合わせ・会場との交
渉、4軍での実施においても子どもたちがイメージしづらいなど新たな課題があった。また当日が
近づくにつれて雨が予想され、雨天時対応にも追われた運動会前であった。



事前に様々な状況を想定しての当日であったが今にも雨が滴り落ちそうな空模様の中、午前中のみで運動会を開催した。後日の振り返りでは様々な方法や過程において「〇〇した方が良かった」等の反省や次年度に向けての可能性が討議され、課題も多く残る運動会であった。その中でも研究会スタッフの事前の情報共有不足、当日の連携不足が目を引く課題であったと振り返り、次の行事・大会に向けてより一層のコミュニケーションを、仲間意識をとスタッフ間で意識統一を行った。

今年度、運動会に新たな変化をもたらしたのは何故か？それは子どもたちの今まで以上の輝ける場所を作りたかったからである。様々な理由で課題も見えた今大会であったが、子どもたちの輝きが無かったわけではなく子どもたちの声を聞いてみると「楽しかった」「来年も来たい」というものが多くあった。



『大きく変わる＝大変』この言葉が身に浸みた運動会となった。

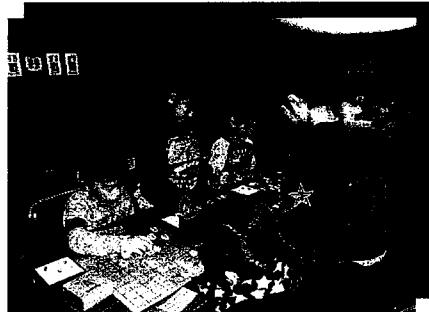
しかし新たな子どもたちの輝きの場と、豊かな居場所の発展となるよう、次大会以降も地域の子ども研究会内で今までの大会に向けたスタッフの方々の思いを継承しながら、これからの“大変”を楽しみ、子どもたちの笑顔があふれその笑顔が保護者に・地域の方々に広がっていくようなともだち運動会を目指す事を第44回の総括・第45回ともだち運動会の意思表明とする。



第19回子ども将棋大会

文責：平和の子子どもの家
藤田 凪紗

- 【日時】 2015年2月7日(土) 13:30~17:00
- 【場所】 育徳コミュニティーセンター1F 早川記念ホール
- 【参加施設】 9施設
(育徳園・愛染橋・阿さひ・長居・今池・都島・望之門・四貫島・平和の子)
- 【参加人数】 95人
- 【大会内容】 各リーグに分かれて対局をする。
(銀リーグ(初心者)、金リーグ(中級者)、名人リーグ(上級者)の3リーグ)
リーグ終了後は、施設対抗団体戦(5人1組)を行う。



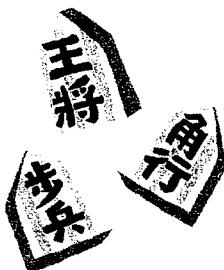
真剣な表情で将棋をする子どもたち

指導棋士 谷川六段との多面指し

第19回将棋大会は、土曜授業の関係もあり、午後からの開催となった。昨年度に比べ、参加施設が増え、多くの子どもたちが参加した。静かな空気の中、子どもたちの「お願ひします！」という挨拶で対局がはじまった。まずは、リーグ戦。日頃とはまた違って、真剣な眼差し。リーグ戦で2回勝ち進むとトーナメントに参加する。勝ったり、負けたりしながらも、盤上に集中する姿が見られた。

団体戦では、各施設の代表が5人ずつ出場し、施設ごとに対局をする。他施設の友だちと一緒に対局をする事があまり無い中、年一回のこの将棋大会ではいろいろな友だちと対

局できるということもあり、将棋好きの子どもたちにとっての楽しみとなっている。初級者から名人リーグに分かれて行うことで、初級者の友だち同士で対局する楽しみ、名人の友だちに憧れをいだく気持ちを経験し、良い刺激を受ける一日になったのではないだろうか。将棋を通して、子どもたち同士が一層楽しめるよう、また、最後まで落ち着いて対局ができるよう、次年度に向けて検討をしていきたいと思う。



春のあそび王国2014

文責：今池子どもの家
多賀井 潤一郎

【日 時】	2015年3月7日（土）13:30～16:00
【場 所】	大阪市立長居小学校 体育館
【参 加 施 設】	11施設（愛染橋児童館学童クラブ・阿さひ保育園つくし会・ 育徳園子どもの家・今池子どもの家・四貫島友隣館子どもの家 長居子どもの家・望之門学童クラブ・平和の子子どもの家・都島児童館 やまと保育園子どもの家）
【参 加 人 数】	204名
【大 会 内 容】	4つの遊びコーナー（けん玉コーナー、こまコーナー、めんこ・おはじ きコーナー、ともだち運動会種目コーナー）、紙飛行機王座決定戦、け ん玉施設対抗戦、けん玉段技名人戦

雨の中、11施設204名の小学生が長居小学校に集結した。6年生にとっては小学校生活最後の大地協行事でもある。かつて「けん玉大会」として多くの小学生たちを迎えてきたこの大会も時代と共に進化し、様々なあそびの要素を取り入れた現在の形になった。日頃、電子ゲームに夢中になってあそんでいる多くの子どもたちが、伝承あそびの魅力を体験し、独楽や剣玉で競い合う面白さを実感できるひとときであった。他施設の仲間と一緒に子どもも大人もイイ顔をしてあそびを満喫した。

紙飛行機王座決定戦 結果

〔低学年の部〕	優 勝	宮垣 鳩司	(長居)
	準優勝	小寺 郁弥	(長居)
〔高学年の部〕	優 勝	石森 恵太	(長居)
	準優勝	前田 秀斗	(長居)



『飛行機王座決定戦』の光景

けん玉 施設対抗戦 結果

優 勝	四貫島友隣館子どもの家
準優勝	都島児童館
三 位	今川学園子どもの家
三 位	長居子どもの家



『段技名人戦予選』のステージ

けん玉 段技名人戦 結果

優 勝	前田 秀斗	(三段 長居)
準優勝	嶋田 聖哉	(初段 四貫島)
三 位	清水 葵	(初段 今川)



『段技名人戦決勝』を見守る会場

第63回大阪市子ども卓球大会

文責：長居子どもの家
川畠 亮輔

【日 時】 平成27年3月1日

【場 所】 大阪市立昭和中学校

【参加人数】 7チーム 68名

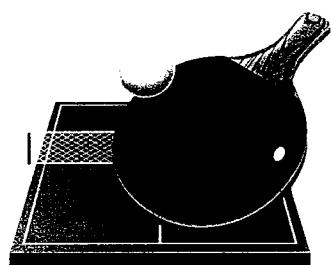
チーム(施設名)	人数
育徳園子どもの家	17名
都島児童館子どもの家	12名
長居子どもの家	4名
今池子どもの家	5名
阿さひ保育園つくし会	12名
望之門学童クラブ	9名
大阪市立西淀川中学校	9名
計	68名

外はあいにくの雨で寒くなったが、体育館の中は熱気と緊張感で包まれていた。1年に一度の大会、この大会に向け必死に練習してきた子や初めての対外試合に目を輝かせる子ども、自分より上の学年の人に挑む子どもなど、様々な目標を持ち、保護者や仲間の応援を受けて試合に臨み、楽しんでいる姿が見られた。

自分の納得のいかないプレーの後には首をかしげ、フォームの確認等を行い、日頃の練習の成果を発揮しようと努力していた。試合を重ねる度にラリーが続いたり、サーブが入ったりと成長していく姿には驚かされた。

午後の試合は予定より早く終えたので、それぞれの技術にあった練習の場を設けた。ドライブの打ち方を学ぶ子、自分より上手い人に挑む子等、それぞれが「もっと上手くなりたい！」という思いを持ち練習に打ち込んでいた。そしてなにより、他施設と交流し、卓球を楽しんでいた事がとてもうれしく思う。

この大会を通じ子どもたちの向上心、成長力の高さには驚かされた。まだまだ可能性を秘めている子どもたち、その可能性を引き出すのは子ども自身の力でもあるが、大人の支えも必要である。これからも子どもたちの可能性を引き出し、子どもたちの豊かな成長を支えていけるよう自分自身も向上心を持ち、成長していきたい。



ワークキャンプ活動を振り返って

文責：今川学園子どもの家
加藤 由美

今年のワークキャンプにおいては、参加人数が例年に比べて極端に少ないという印象であった。参加者を募るために指導員が SNS 等を利用して OB・OG に呼びかけを実施した施設もあったようだが、クラブ等他の予定があるため不参加という返信が多くかったようだ。

歳を重ねるごとに交友関係が広がり、また彼らの中の優先順位も変化するため、ある程度仕方がない部分もあったかもしれない。また、特に今年度については、指導員の入れ替わりが多く、OB・OG と上手く連携がとれなかったという事情もあったようだ。



しかし、長期的視点で言えば、純粋にワークキャンプを楽しいと思える頃から「大きくなつてもワークキャンプには参加したい」と思わせる話しみ、短期的視点で言えば、ワークキャンプの意義の話しみや魅力的なイベントの発案等、指導員の努力不足も要因として挙げられるのではないか。

参加者が減るということは、それだけ実施できる活動の幅も狭くなるということを、まずは指導員がしっかりと受け止め、一丸となって、参加人数の増員に取り組まねばならないと考える。

【2014年度 活動実績】

日程	場所	活動内容
4月27日	山の家	山の家開設作業
9月21日	山の家	リバートレッキング
10月19日	山の家	薪割り・クラフト材料収集
12月7日	山の家	冬支度
3月15日	山の家	山の家開設作業

【小学生コメント】

- ★リバートレッキングに初めて参加して楽しかった。
- ★諦めかけたけど、ゴールできてよかったです。
- ★不安だったけど、ここ(自施設)以外の友達ができるよかったです。
- ★鹿が死んでいてびっくりした。

【参加者 内訳】

小中高生 57名 大人・職員 37名 合計 94名

第16回自然体験施設応援バザーと中高生OB・OG活動

文責：育徳園子どもの家
隈元 まひろ

【日 程】2015年1月25日

【会 場】今川学園保育所

【参加人数】中学生・高校生17名、大学生・社会人11名

毎年続けている活動で、中高生にもバザーが定着してきている。今年度はバザーでの取り組みが、ワークキャンプへと繋がっていることを中高生が実感できることを大切に考え、広報・自然体験・有料あそびコーナーを中心に活躍の場をつくり準備を進めてきた。

各施設でセツルの家や山の家に行った思い出・やってみたいことを彼らから事前に集めると、「星がきれい」「友だちの輪が広げられる」「木のアスレチックをつくりたい」「みんなと一緒に泳いだことが楽しかった」などの思いが集まった。中高生が自然体験の中で感じ・考えてきたことを指導員の私たちも改めて教えてもらい、DVDで魅力を伝える役割を担ってもらうことができた。

第16回自然体験施設応援バザー in 今川学園



バザー当日、自然体験コーナーでは丸太を切る小さな子どもにやさしく手を添えたり、丸太が動かないように押さえる様子が見られた。有料・無料あそびコーナーでは来てくれた子どもたちに説明をし、一緒につくる・あそぶ役割を楽しんでいた。イベント司会や東吉野物産コーナー、チラシを配る広報活動などその他の役割の中でも、いろいろな施設のスタッフやお客様と触れ合う中で、自然体験施設をたくさん的人が応援していること、自分たちもその一員であることを実感できた活動であった。また他施設の中高生が1つのコーナーを担当することで相談や協力をし、つながりづくりの場となった。

中高生と一緒に計画を立て、バザーを創り上げることが今回はできなかったが、ワークキャンプやバザーを通してできたつながりをもとに、中高生・OB・OGと一緒にこれから活動を考え、力を引き出す活動の場を創っていけたらと思う。

研修活動の報告と1年の振り返り

- 卓球指導者研修会
- キャンプファイヤー研修会
- 研究会時間内での情報交換について
- 指導員一人一人の振り返りと次年度へ向けて

卓 球 指 導 者 研 修 会

文責：長居子どもの家

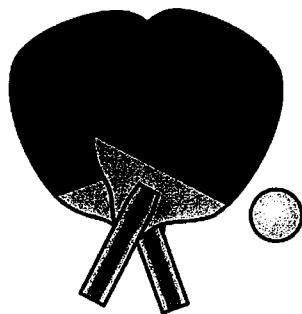
川畠 亮輔

日 時 : 6月20日(金) 10時~12時

場 所 : 今池子どもの家

講 師 : 寺田 憲治氏

参加人数 :



1. 卓球の基本確認(正しいラケットの握り方や初心者への指導など)

最初にラケットの握り方として、シェイクとペン二種類の持ち方があり、注意点を教わった。

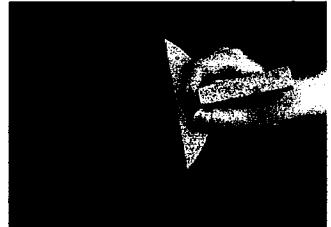
【シェイク】

親指と人差し指でラケットの面を挟むように持ち、挟んだ指が同じラインに来るよう持つ。



【ペン】

親指と人差し指で、グリップを囲むように持ち、中指、薬指、小指の三本はバックの面に添える。この3本指は広がりすぎないようにする。親指、人差し指が片方ずつ離れても、ラケットの面がぶれないように持つ。



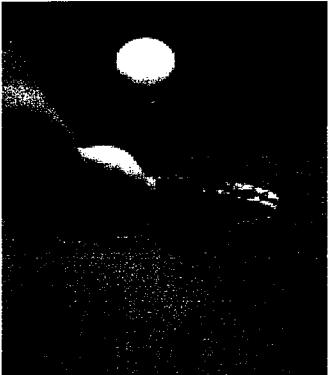
2. 色々な練習方法

● 「卓球台、壁なし」ができる練習方法

ラケットとボールだけでのポンポン打ち。アップのみ、バックのみ、アップとバックの交互、できる子には側面や、グリップなどでもする。

親指と人差し指で丸を作り、落ちる球をキャッチする。次にそのままラリーをする。

これらを行うことにより、球に合わせて打つ事ができるので、飛び過ぎず、コントロールも効くようになる。



●子ども達だけでできる練習方法

上記の事を踏まえ台に移動し、手でラリー→ラケットでキャッチに発展させていく。子ども同士の場合、球出しへ手でも構わない。次に台の狭い所でラケットを使いラリーを行う。ラケットを前に出して打つと、飛び過ぎてなかなか入らない。上にスイングするように打つとコントロールでき、入るようになる。次にそのまま台の回りを回っていきラリーをするとより、コントロールの練習となる。

●正しいフォームの作り方

上記であったように、上にスイングすればコントロールしやすいが、上にスイングする為には肘が体から離れなければならない。その時のフォームの作り方としてボールを肘と脇に挟み、ボールが落ちるようにスイングする。他にも、片足でボールを踏んだり、反対側の脇にボールを挟むことでフォームの改善となる。

次に姿勢は股関節を腰の方に入れると、お尻が出る。その体勢で膝を曲げ、胸を張る。これらを行う事によりスムーズな体重移動が行える。

●体重移動から、動いての打ち方

動き方には 2 種類あり、打つ前に動き球の正面に入るのと、打ってから動く（とびつき）の二種類がある。股関節や腰を体重移動させることで、とびつきが行いやすくなる。練習方法として、3 人程度並び、1 人ずつ打っていくローテーションを2, 3 分行う事が効果的である。

●力の差がある子どもの試合での工夫（ハンデ等）

強い子どものコート側にはフェイスタオル程の物を置き、球が不規則なバウンドをするようにするなど、台に色々な障害物を置くことで、ハンデになると教わる。

《今回指導を受けて…》

指導者として基礎的な事をたくさん教わることができた。

最後に寺田先生がおっしゃっていた、相手がいるから試合ができる、だからこそ相手に敬意を払わなければならない。この事は子ども達に指導するにあたり、とても大切な事だと感じた。この研修で学べたことを子ども達に伝え、「スポーツマンシップ」をきちんと理解し、卓球がもっと楽しくなるようにしていきたい。

キャンプファイヤー研修会

文責：愛染橋児童館

辻井 歩

- 【日 時】 6月26日（木）19：30～20：45（受付18：45～）
【場 所】 社会福祉法人 今川学園
【参加人数】 65名（15施設1大学）
【講 師】 日本キャンプ協会のご紹介により、（財）大阪市青少年活動協会で
ご活躍されている宮崎良雄氏
【ね ら い】 保育士や子どもの家・学童指導員を対象として、夏のキャンプやお泊り保
育などの活動に活かせるよう企画。
【内 容】 キャンプファイヤーについて薪組を数種類、点火から消化までの流れを詳
しく実際に薪を囲んで紹介。幅広い年齢（幼児～学童期）で対応できる歌
遊びやゲーム等、一連の流れを中心に研修を実施。

★参加者の声★

参加しようとした理由は？

- ・キャンプファイヤーの段取りや薪組、進行の仕方など正しい知識を得たかった。
- ・毎年参加しており、保育に役立てられることが多いから。
- ・保育の一貫としてどのような遊びが子ども達に良いか学びたかった。



参加された感想は？

- ・知っている歌でアレンジし、何通りも楽しめた。
- ・（学生）学びにつながった。
- ・実践的な研修で良かった
- ・時間が短いように思う。もう少し延ばして欲しい。
- ・外で火を囲んでの様子も見たかった。（雨天の為、今回見送り）
- ・薪組は組まれた状態しか見たことがなかったので（組むところから）見れて良かつた。
- ・数年前の研修と内容がほぼ同じ。初心者・初めての方には良いが対象をどこにするか、合わせて内容も絞る必要がある。

今後研修会で学びたいことは？

- ・高学年向けの頭を使うゲーム等
- ・違う内容のキャンプファイヤー研修（火の神様について・高学年向けのファイヤーなど）
- ・バスレク ・自然遊び ・ゲーム進行の実践 ・新しい歌、遊び、ゲーム

【研修を終えて…】

「キャンプファイヤーの一連の流れを薪組からして頂き組み方を見る事が出来勉強になった」という方や「ゲームの進行方法などが分かり良かった」との声が多く聞かれた。しかしアンケート調査からは「初心者向けの内容だったので中級・上級の内容が知りたい」「時間の延長希望」「その他（ファイ
ヤー以外）の内容」を望まれている事が分かった。次年度は、会場施設の検討や新たな講師の開拓、
内容についても検討し、研究会スタッフ・参加者にとって、より学びを深め保育現場に活かせるよう
な研修会を目指したい。

研究会時間内での情報交換について

文責：望之門学童クラブ
大西 奈々子

昨年度から引き継いで実施してきた情報交換。意図として“他施設の取り組みを知る”事が挙げられるがそればかりではなく、子どもたちの放課後を担う施設職員として同じような悩みを持ち、それを共有できる場として研究会の時間の中で情報交換として実施してきた。

1学期には担当からのテーマ発題を、2学期にはスタッフ持ち回りでのテーマ発題を行ってもらい、各施設での取り組み・個人の思いや対応方法など様々な意見を交わし合った。

- ・工作・制作の方法、工夫について
- ・保護者対応（トラブル例・上手く行った事例）
- ・高学年女子の遊びについて（取り組みや行事）
- ・整理整頓・忘れ物について
- ・保護者との関係作り
- ・地域の子どもと施設に通う子どもとの関わり
- ・お便りの内容と工夫について
- ・学童ならではのヒヤリハット
- ・保育園との交流・連携について
- ・指導員としての意義
- ・学力の気になる子どもへの支援方法
- ・保育園職員の学童児への関わりについて
- ・異性の高学年児との関わり方
- ・小学生時期に遊んでいた遊び
- ・冬休みの過ごし方

【テーマ例】

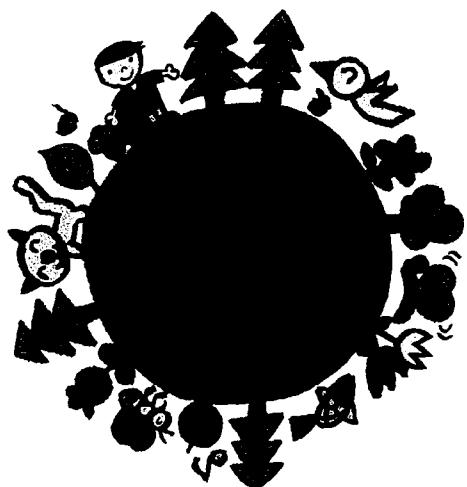
一つひとつのテーマにおいては小さい悩みもあるが研究会で話し共有することで、同じような悩みを持った人がいる事に安堵し共に取り組もうと活力が生まれたり、施設の垣根を越えて話す中で新たな視点が見いだせたりとそれぞれに収穫がある時間となっていた。

2学期にはスタッフ持ち回りでテーマ発題を行った事で、自身の思いを他者に伝える難しさや準備の労力など感じる良い機会となったのではと思う。

3学期には研究会内で定期的に時間を取ってそれが発題するのではなく、関心がある事・悩みを共有したいと思う方より発題提供をする形を取った。

新たに“大地の子”活用方法として行事に向けての取り組み方や施設の紹介を作成し、配布・掲示する事で研究会スタッフだけではなく自施設に通う子どもたちへも他施設の事・子どもたちの姿が発信できる機会となっている。

次年度以降、研究会のスタッフだけに留まらず様々なテーマでの情報の共有が出来、施設や子どもたち・保護者・地域の方々へより良い形で情報の発信が出来るよう討議を深めていきたいと思う。



子どもたちが笑顔で安心して過ごせるように

都島児童館学童クラブ
尾崎芳江

夜歩いていると「オギャー」と乳児の泣き声が外に響き渡っていました。その建物は産婦人科でした。私は、産まれて間もない赤ちゃんが精一杯声をだし泣いている姿を想像し自然と笑顔にさせられました。お腹に小さな命を迎え出産を決意した母親は、お腹が大きくなると共に幸せや嬉しさを感じ、自分が親になれるのかと不安な気持ちにもなると思います。その中で、10ヶ月かけてお腹のなかでの成長を喜び、我が子のことを守るのは自分しかいないという母性が育ち愛おしいかけがえのない存在だと感じます。出産を乗り越えて、肌と肌を触れた母子は幸福感に満ち溢れたはずなのに、近年、子どもの虐待が多くあげられ理不尽さややるせない気持ちにさせられます。年々増えている現状に疑問ももち、今年度は、研究活動の影響もあり“愛着”や“親子関係”について考えることが多い一年となりました。

私たち指導員は関わる子どもの数の倍もの保護者や祖父母と関わります。私は子どもが苦しさを感じている事や保護者に対して甘えたい等があれば、当初は「もっとこういう関わりをしてほしい」と求めてしまうこともあります。しかし、保護者と共に子どもの豊かな育ちを目指す上で子どもの気持ちの代弁に偏って力を注いでいました。今回、愛着障がいについて研究活動を重ね児童部会で「子どもが苦しい=親も苦しい」という視点から保護者に寄り添うことの大切さを強く感じました。保護者が安定していない場合には、共に子どもの育ちを考える余裕がありません。子どもたちが安心して豊かに健やかに育つためには、子どものおかげでいる環境や周囲の人間関係が安定していることが絶対条件であるはずなのに、保護者が不安定であればそうはいかないからです。

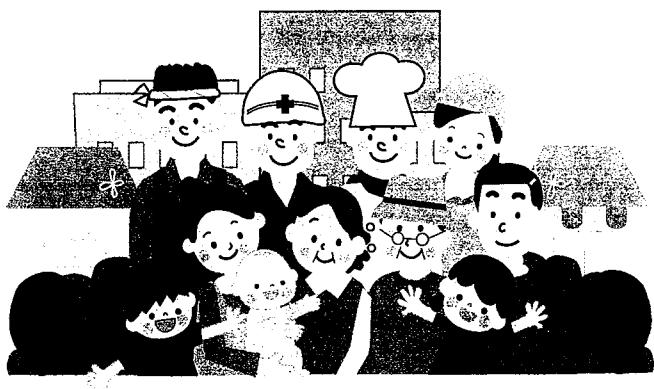
自施設では「異年齢児との相互のふれあいにより社会性を養い、良い人間関係を学ぶ」「いきいきとした放課後の保証」や「遊びや自然体験をとおして、体を鍛え情緒を豊かにする」という3本柱を目標に掲げ、それが研究会のテーマである「地域の子どもたちの豊かな生活・成長を目指す」に通ずると思っています。それに沿って、自施設では、質のいい体験・経験の場となり、たくさんの仲間（子ども同士、大人）と共に育つ力が身につけていきたいと願い、活動や関わりに取り入れています。また、子どもたち一人ひとりに合った関わりを行います。その結果、この一年間も子どもたちの成長を多々感じることができました。ただ、社会性を養うためにも、いきいきと過ごすためにも、情緒を豊かにするためにも、受け止め受け入れるだけの心の安定がやはり欠かせないです。心が不安定だと質のいい体験や経験をいくら取り入れたとしても、全てにおいて不十分になってしまいます。その為には、自分自身が親にとって愛おしい存在であり尊い存在であると実感できていることが重要です。子どもたちが笑顔で安心して豊かに健やかに育つためには、体験や経験だけにこだわらず子どものおかげでいる環境や周囲の人間関係をじっくり見極め、子どもの苦しさのもとを知り、少しずつアプローチすることが大切です。その根っこに愛着関係が影響してある場合であれば、家庭支援が私たちの大きな役割だと感じました。

現代、人間関係の希薄さから、多くある子育ての情報を頼りに子どもの育ちの目安を知り、我が子とかけ離れていれば親である自分自身を責めて苦しみ神経が過敏になり、子育てがしにくい時代なのかもしれません。その結果、絶対対的な愛おしい存在であるはずの我が子に対して歯車が狂い、出産後の疲労や環境の変化から愛おしく思えなくなり虐待へ近づいてしまうのではないかと思われます。乳児期の親子関係や絆づくりが重要であることをしった今、虐待がなくなり全ての子どもたちの笑顔が保証される世の中になってほしいと願い、私ができることを小さな力であっても一つずつ歩んでいきたいと思いました。

年間テーマを通して

長居子どもの家
大山彬子

ここ数年、地域の子ども研究会の年間テーマとして上げられている「地域の子どもたちの豊かな生活・成長を目指して」。2年ぶりに学童の担任となった2014年。2年前も同じテーマで、当時の私にはとても大きなテーマであった。当時は、子どもたちとの関係作りと心に寄り添うことに一生懸命で、心にきちんと寄り添えているのかと、毎日、自問自答を繰り返し、「子どもたちの成長」＝「未来」を見据えるところまで到達できていなかったのではないかと思う。しかし、今もう一度テーマを見直し、自問自答していた時の経験と今の自分を合わせてようやく、「子どもたちの成長」＝「未来」を見て子どもたちと関わろうと思えた1年だった。子どもたちと関わる中で、「子どもたちの成長」＝「未来」＝「心の育ち」の流れが自分で見えてきた。それを踏まえて、心がけてきたことは「心を育てる」である。これは子どもと関わる指導員にとって、基本的なことの1つである。その基本的な部分をもう一度、振り返り、見直し子どもたちと関わって来た。いかに、豊かに心の成長ができるかは、周りにいる大人に大きく影響されると思う。指導員である私も「周りの大人」の一人として、責任を持ち、心を育てなければならない。その思いのもと、子どもたちひとりひとりの心が育つように子どもたちと過ごしてきた。まだまだ芽も出ていない状態だと思うが、いつか必ず芽は出ると信じてこれからも関わって行きたい。



そして、地域福祉施設の指導員としても一つ大切な事がある。それは、施設を利用する子どもたちだけではなく、「地域の子どもたち」に対し、「地域の子どもたちの豊かな生活・成長を目指して」と言うテーマの中で、地域福祉施設の指導員である私が出来ることを見つける役割があるという事である。見つけ出した点を意識し、実際に行動に移していく力が必要だと思う。福祉施

設の一職員としては小さな力なのかもしれないが、一番身近な存在である、施設を利用する子どもたちと共に地域に目を向け働きかけことで、大きな力になり、いつか「地域の子どもたち」にも、「自分が住んでいる街・地域ってなんかいいな」と感じてもらえることを信じ、「地域」と関わって行きたいと思う。

一年間を振り返って

長居子どもの家

川畠 亮輔

昨年度担任した年長組の子ども達と一緒に子どもの家に進級した。初めて学童指導員となり、研究会に参加した私にとって、学びの多い一年となった。

指導員になって、一番最初に感じた事は地域との繋がりの重要性であった。

凶悪な犯罪がニュースで流れるのを見ると胸が締め付けられる思いになる。中には地域の見守りがあれば、防げた可能性のある事件などもあった。

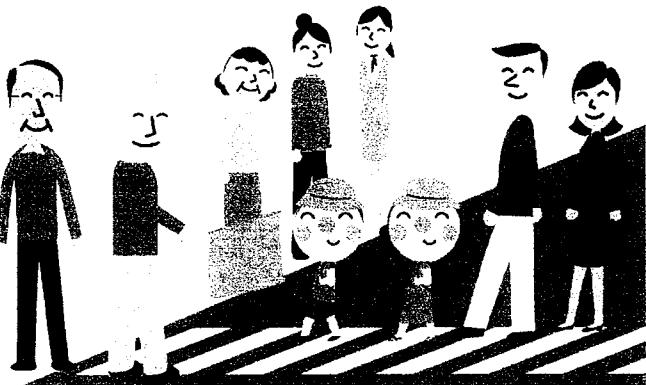
そんな中、学校に子どもを迎えて行く帰り道に商店街の方が「おかえり！今日は先生と一緒にねんな！いってらっしゃい！」と声をかけてくれた。地域の暖かさを初めて感じた出来事であった。それだけでなく、公園で遊んでくれる人や、色々な遊びを教えてくれる人もいた。小さな事ではあるが、子ども達が地域の方と触れ合い、笑顔になる姿を見ていると、とてもうれしくなる。それと同時に今までの先輩指導員の方が築いてこられた地域との繋がりを感じ、これからも繋ぎ止め、そして広げていかなければならぬと強く感じた。

「地域の子どもたちの豊かな成長・生活を目指す」が今年度の研究会のテーマであった。年間テーマにある「豊か」とはどのようなことなのか。様々な人との出会いが子ども達を「豊か」にするものであると私は思う。しかし今は、人と人との関係がどこか希薄になっているように感じる。そんな中で施設として、職員としてどのように働きかけるか、どのように地域と繋がっていくか。そのことを考えながら日々研究会に参加した。

大阪市地域福祉施設協議会主催の元様々な行事が行われてきた。子ども達が他施設の子どもと関わり繋がり楽しむ。それだけでなく、地域の方も参加することができたり、楽しむ事ができる行事もあった。私一人で地域と繋がることは難しいかもしれないが、自施設はもちろん、他の施設の職員とも繋がり、地域への繋がりとの架橋となることは可能であると感じることができる行事であった。

行事だけではなく研究会の中で先輩指導員の方と情報交換や研究活動では刺激的で、勉強になることはばかりであった。

この経験を活かし地域で子ども達を見守り、豊かな成長・生活ができるような環境を作れるように、努めていきたい。



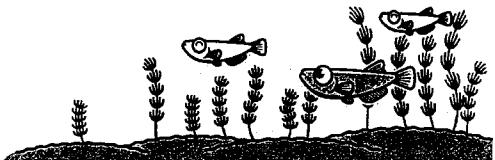
今年度を振り返って

育徳園子どもの家
隈元 まひる

年々子どもたちが分刻みで生活、特に放課後を過ごしているように感じる。帰ってくると時計を気にし、やっていたことを途中で放りだして塾や習い事に出かけていく。あそびをしようと誘うと「いいわ」と断わる、始めたものの途中で抜けていくなど夢中になってあそぶ楽しさを知らない子が多いように感じる。

豊かな生活・成長とは何かということを考えた時、そのひとつとして人ととの関係を築いていく力があるのではないかと思う。集団であそぶ中でぶつかり、ときにはケンカをしながら、楽しさを共有・共感していく中で育まれるものは大きい。まずは指導員があそびに誘い、あそぶ姿で引きつけ、夢中になる楽しさを見せる大事さを痛感している。

中高生活動の担当となり、行事ひとつ1つが中高生OBの力に助けられていること、それが中高生の力となっていることを感じた。施設では小学生と一緒にあそび、リーダーシップを発揮して引っ張る姿を頼もしく感じることが多々あった。彼らの「自分もしてもらったから」という気持ちがうれしく、年下の子を思いやり、指導員への気遣いに驚かされることが多かった。小学生は彼らに憧れて成長し、中高生たちが今後、地域・社会へとその力を広げていってくれるのだろうと期待が膨らむ。



初めて地域の子ども研究会へ参加することとなり、研究活動や行事をしていく中でどのように子どもたちに返していくのか、返していくのか悩んだ1年だった。また、地域の施設職員としてできていることはまだまだ少ないが、数多く起こっている事件や研究活動を通じて、子どもを守るために地域へ目を向けることがますます大切であることを感じた。子どもたちの豊かな生活・成長をめざして、一緒に楽しみながら保護者と向き合い、子どもと向き合っていきたい。



子どもたちにとっての「本当の豊かさ」とは

今川学園子どもの家

加藤 由美

年間テーマが「地域の子どもたちの豊かな生活・成長を目指して」であるということから、私は子どもたちにとっての「本当の豊かさ」とは何かを考えた。

新年度開始当初から、「暇や。することがない。」と訴える子どもは少なくない。その度、私たちは指導員として、子どもたちに活動のためのヒントを与えるが、「どうやってするん? わからん。やってや!」と、すぐに丸投げしてしまう。考える機会を与え、またそれを習慣としてほしい為、私たちはそれ以上のこと以外は何も言わないのだが、今度は、それが「なぜ指導員は子どものために動いてくれないのか」という保護者からの園の対応に関する不満となる。

このような一連の流れが繰り返される中で私が感じたのは、保護者、そして子どもの中の「豊かさ」とは、“子どもたちが望むものは全て大人が用意し、子どもたちは大人が敷いてくれたレールの上をただ進み続けられること”となってしまっているのではないか、ということだ。

たしかにそのような状況は、一時の安易な満足には繋がるかもしれない。しかし、その子どもたちが成長し、自分の生き方を自分で選択しなければならない時期が来た時、逆に迷いや障がいとなる可能性があるのではないだろうか。歳を重ねれば重ねるほど、背負わねばならない責任は大きくなり、また時には誰も歩んだことのない道を自ら切りひらかねばならないこともある。そんな時、保護者や指導員等、レールを敷いてあげられる人は、もう誰もいないかもしれない。

私たち指導員は、日々変化・成長していく子どもたちのことを見て、その時の最善を子どもたちと一緒に考えながら指導を行っている。そして、その中で子どもたちに判断を委ねることもある。しかしそれは決して子どもたちのことをなおざりにしているわけではなく、自分たちで試行錯誤を繰り返しながら自分たちなりの正解にたどり着く力をつけ、また、常に誰かが自分の進むべきレールを敷いてくれるわけではないという、社会で言えば当然のルールを自然と身につけてほしいと考えているが故のことである。そのことを子どもたち、そしてその先にいる保護者の皆様にも理解してもらった上で、子どもたちが自分の力で未来を切り開くための「本当の豊かさ」を見いだせるように、今後も日々考えて活動を続けたいと思う。



年間テーマと1年の振り返り

愛染橋児童館学童クラブ

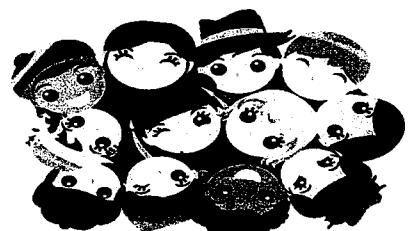
辻井 歩

指導員、研究会も2年目となり、また自施設も子どもの家事業から留守家庭児童対策事業へと移行し、昨年とはまた違った雰囲気でスタートした今年度。今まででは地域の子ども達も自由に利用できたのに、どのように対応していけば良いのか?登録児童、登録外児童という言葉によく悩んだ一年だった。だが、子ども達の姿は変わることなく、公園で遊んでいると地域の子どもを自然に巻き込み、鬼ごっこやリレーなどして指導員も一緒に遊んだ。このような場面から、地域の子ども達とのつながりを大切にしていこう、と感じた。しかし、そのつながりの中でどのように地域の子ども達の成長・生活に関わっていくかは、私の中ではまだ踏み込めずにいて、公園で遊ぶ・話すなどが多く、この研究会で学んだことを意識し、児童館に通う子どもはもちろん、地域の子ども達にも一歩ずつ歩み寄っていきたいと思う。

今年度研究会の中で特に印象に残っている事は、研究活動で『愛着障がい』について調べた事である。きっかけは誰もが感じたことがあるであろう、「保護者対応の難しさ」について考えたときに研究会のメンバーで意見交換をする中で出てきた『愛着障がい』という言葉。愛着についてはこれまで研修に行ったり学ぶことが多かったので理解しやすかった。

そして、テーマとなった「愛着障がい」を文献などを通して学んでいく中で、愛着障がいは自分にも当てはまる事が多々あり、また、児童館を利用する子ども・保護者の課題にもこの愛着障がいが関係していることが多いのではないか、と考えた。児童館に通う子どもたちは多感な時期であり、保護者もその姿に悩んでいたり、また子ども自身が保護者に対して自分の気持ちを言えない、などの悩みを持つ子どももいた。保護者が思っている・求めている子どもの姿と子どもが思っている・求めている大人の姿にすれ違いを感じ、悩みに繋がっていると思った。この事に気付けたことはとても大きく、普段の保育で子ども達に対しても、保護者に対しても、自分と関わる全ての人に対して一つ視点が増えたと思う。子どもの幸せを考えて関わるとき、保護者の幸せについても考えながら関わる事で子どもの幸せにつながると信じてやっていきたい。

また、ワークキャンプや中高生の活動についても難しさを感じた一年であった。ワークキャンプについては自施設で魅力を伝えきれなかったり、子ども達が求めている・思っている場所を掴めなかつた為に参加に繋がらなかったように思う。中高生の会など施設で取り組んでいるが、楽しみに意欲的に参加してくれる子どももいるが「めんどくさい」と参加しなくなっている子どももいる。特に中高生の会は地域のどの中高生が参加しても良い、となっているが、誘い掛けが難しく、ほとんどが卒園児で、地域の子どもは数名が時々来るくらいで、なかなか繋がりが持てていない。しかし、その卒園児や数名の地域の子ども達の時間を大切に、共に過ごしていく中で繋がりを広げていき、少しでも子ども達の力になれれば、と思う。そして、仲間づくりや自分の役割、居場所を見いだせるワークキャンプにも繋げていき、中高生の子どもたちにも「楽しい!」といきいき活動できる場を作つたらと思う。



人と人との和の中で

望之門学童クラブ
大西 奈々子

今年度、人と人との“和”をよく考えた1年であった。自施設の職員、子どもたちとの和から得た・感じた沢山の経験や芽生えた思いは、今後私が過ごす中で貴重な資源となるだろう。

地域の子ども研究会の中でも人との和の中で気付かされ、立ち止まり、共に考えた1年であった。中でも児童部会に向けて事前に討議する中で、今を生きる子どもたちが“人の関わり”“和”をどういった意識で・視点で受けとめ、日々過ごしているのかを改めて考えさせられる機会となった。

子どもたちの回りは物で溢れ情報が満ち、人の関わりが絶たれていても知りたい情報が得られる環境にある。そんな環境からバーチャルの中での体験しか得ず、与えられた達成感しか持ちえない。

それによって自ら「達成感を得る」様な経験を探す術を持たず、与えられなければ（物が無ければ）何も出来ないというような子どもの姿もある。そんな時代を過ごす子どもたちだからこそ様々な実体験の中で挑戦し、失敗・成功から挫折や達成感を味わい、体験から得られる自分だけの経験を積み重ねてほしいと願う。



“自分だけの経験”と書いたが、“自分だけ（1人）”では出来ない。挑戦する一歩を踏み出す勇気を後押ししてくれる仲間がいる。それを温かく見守る大人の存在が必要になる。失敗・挫折をした時に支えてくれる人が、成功した時に共に喜んでくれる人の存在がより一層の達成感をもたらすのである。その中で“人の和”を感じる事が出来た子どもたちは、今後過ごす中の“自分だけの経験”を与えられたものではなく、自身で積み重ねる事が出来るようになると思う。

様々な環境・変化の中で子どもたちが迷い、悩む場面もこれからたくさん直面するだろう。そんな時には子どもたちと共に悩み、その中から周りの支えに目を向け、人の和に力を借り、人の関わりでのみ得られる経験を積み重ねて欲しいと思う。

2014年度も私自身子どもたちや保護者の方、上司や後輩・友人など沢山の人の和の中で過ごしてきた。その中で、これからも支えられることに感謝し、支える事が出来る喜びを感じ温めていけるよう“自分だけの経験”を積み重ねていこうと思う。



1年を通して

阿さひ保育園つくし会
吉野 裕志

自分が『地域の子ども研究会』に参加して6年目。正直、ここまで長くいるとは思っていませんでした。1年目の時にいた研究会メンバーも半分以上は変わってしまい、その分新しい出会いもありました。研究会のみならず、大地協の行事などに関わりたくさんの人と出会いました。人見知りの自分にとって新しい出会いがあるたびに苦痛で仕方なかつたのはここだけの話です。

さて、今年度もたくさんの入れ替わりがありました。参加しているメンバーの気持ちもバラバラです。同じ方向を向くことはできたのでしょうか？正直、自分にはわかりません。各行事の目的もねらいも話はしましたが共有できていたかどうかは、今となっては“当人のみが知る”状態だと思います。

参加している各施設、考え方も目的も違うなか全員が同じ方向を向くのは難しいことだと思います。自分も1年目の時、学童に慣れることが精いっぱい「なんで週に1回もあつまらなくてはいけないんだ！あと飲み会とか多すぎる！」とよく思っていました。こんな事書いていたらあとで怒られるかもしれません、それぐらい嫌でした。今では、そんな事なくなりましたが、それもただ単に知っている人が増えただけで、自分以外の参加メンバーが全員変わったらきっと同じように思います。

研究会は行事をこなすだけの集まりではありませんし、「行け」と言われて参加する場でもありません。参加する以上はたくさんの事をしつつ、たくさんの人と出会い、たくさんの事と向き合って成長していくべきだと思います。偉そうなことを書いていますが、はたして6年目の自分は、1年目の頃の自分よりマシになっているのでしょうか？少しでもマシになっているといいな、と思います。今年度はたくさんの人に支えてもらいました。この場をお借りしてお礼を・・・ありがとうございました！

最後に、ここに書いてある文章がいつどこでだれが見るのでしょう？そしてこの冊子は今どこで保存されましたか？きっと、他の年度の報告冊子と一緒に置かれていることだと思います。もしかしたら、この報告冊子に関わった全員がいないかもしれません。

これらの報告冊子が、今手にとった人にとって少しでも迷いを晴らすものになれば幸いです。

また手にとってくださった先輩や施設長の皆様、この冊子に載っているものが2014年度研究会参加メンバーの報告です。ありがとうございました。



今年度を振り返って

やまと保育園子どもの家
坂本 晴佳

今年度初めて子どもの家の指導員として勤め、また、地域の子ども研究会への参加となり不安の中でのスタートとなった。研究会では分からぬ事ばかりで戸惑いも多かった。

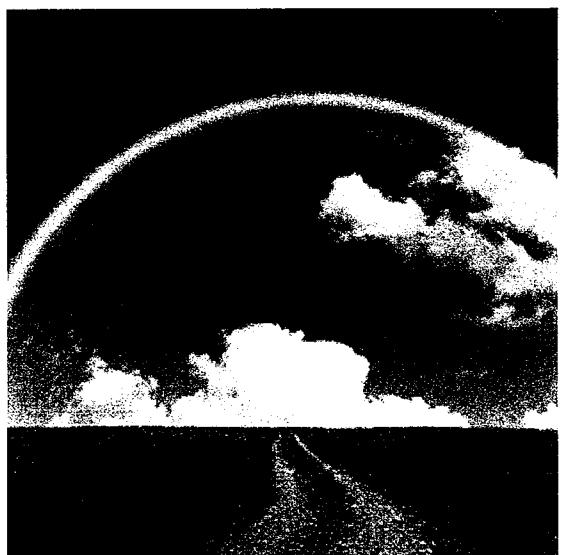
今年度の初めに、「地域の子どもの豊かな生活・成長について」指導員で話し合いをした。多くの先輩方が意見を挙げる中で、このテーマについて私自身初めは漠然としたイメージしかなかった。しかし、日々の子どもとの関わりの中や、他施設との合同の行事を通して豊かな生活・成長とは子どもたちにとって楽しく過ごせて安心できる場所があること、近くに頼れる大人が居ることだと思う。

今年度の六月の合同遠足を通して他施設との仲が深まり、一年を通して関わりを持つことが出来た。合同行事があるたびに「～は来る？」と他施設の子どもを気に掛ける姿が見られるようになり嬉しく思うのと同時にこの繋がりを今後も大切にして欲しいと思う。そして、ともだちドッジボール大会やともだち運動会、合同遠足などの他施設との合同の行事は人と人の繋がりの大切さを感じ、輪を広げる為には欠かせない機会だと改めて感じた。

この一年間を通して、豊かな生活・成長については冒頭で述べたように、子どもたちにとって楽しく過ごせて安心できる場所があること、近くに頼れる大人が居ることだと思うが、それを満たすためには子どもたちにとって指導員・子どもの家とはどういう存在であるべきなのかということがこれから先も課題になると思う。

日々業務をしている中で、子どもの家を卒業した中高生が遊びに訪れることがある。中高生にとって安心できる場所・頼れる指導員の存在があるからこそこのようにして戻って来るのだと思う。そんな中高生の姿を見て、今の学童期の子どもたちが卒業しても同じように戻って来られる居場所を設けられるよう心掛けていきたい。

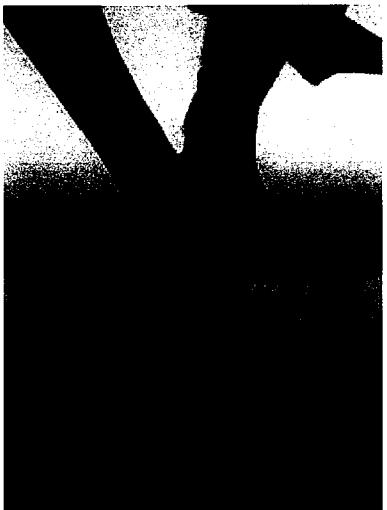
様々なことを感じながら成長する学童期だからこそ、子どもたち自身も、日々関わる指導員もたくさんの悩みを抱えながら過ごしていると思う。多数の施設の指導員が集まる研究会では指導員同士悩みを共有し合う場として上手く活用ていきたいと思う。そして研究会で学んだ子どもたちにとって必要なことを、日々の関わりの中で子どもたちに返し、豊かな生活・成長に繋げていきたい。



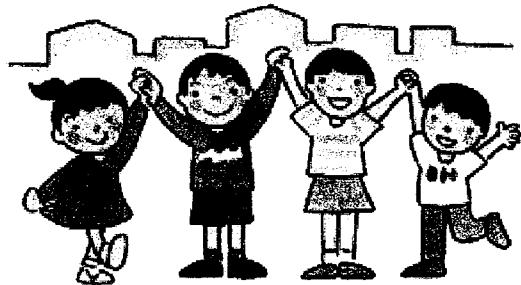
『地域の子どものたちの豊かな生活・成長を目指す～つながる安心感～』

今池こどもの家
多賀井 潤一郎

子どもの豊かな生活のベースとなるものには、人とのつながりが欠かせない。私自身、指導員として大切にしていることの一つに「生きる力を育む」という思いがある。それは、「人とつながっていける力を育むこと」であると考えている。私は、「人とつながっていける力を育むためには何が必要なのか」また、「子ども自身が落ち着いて自分の気持ちを話せる環境を整えていくにはどうすれば良いか」ということを常日頃から考えるようしている。実践の中では、丁寧な言葉づかいや態度で子どもと向き合うように心掛けている。今池こどもの家は、地域の児童館として0歳から18歳までの子どもや保護者、その他20代、30代の利用者も日々訪れる。そんな中、一人ひとりの個性を見極め、育ち（子育ち・親育ち）をサポートできるように意図的な仕掛けを準備したり橋渡しする中で、一緒に遊んだり、時には一緒に遊び姿を見守ったりしながら、施設を利用する一人ひとりが「安心できる居場所」と思えるような関わりを続けていけるように努めている。



人とつながり合えているという安心感が実感できると、その関係性の中で自分自身を冒険させることができたり、認めてもらいたいという欲求が生まれることもある。『なあなあ、見といてな～…。』と、認めてもらいたいという表現で素直に伝えてくれる子どもは、こちらとしてもつながっている実感が持てる。逆に、つながりを持ちたいけれど、ストレートに伝えることが出来ず、天の邪鬼なことを言ってみたり、試し行動をしたりする子どもも居る。その表現からは「きっと、つながりを実感したいんだろうな」という非言語の中から読み取れる心の内側にある思いが推測される。個別の支援計画を立てる中で、様々なプロセスが生まれる。アプローチの方法や距離感は人それぞれだが、支援していく中で確立できた「つながり」や「つながり合えた絆」といった心の安心感をベースにして、「一人ひとりの子どもが自発的に活動し、意欲・充実感・自信を持てるような支援」ができるように、これからも取り組み続けていきたい。



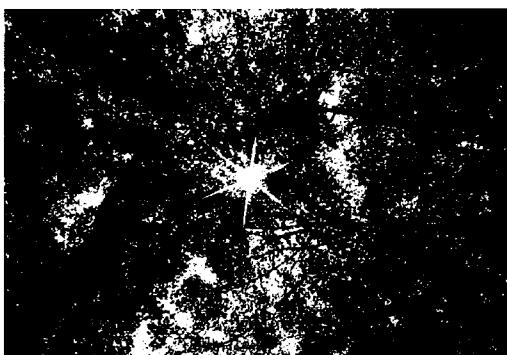
一人ひとりの“豊かさ”を目指して

やまと保育園子どもの家
角中 恒介

今年度2年ぶりに研究会に復帰し、改めて考えた『地域の子どもたちの豊かな生活・成長を目指す』という地域の子ども研究会の年間テーマ。

“豊かさ”とは何なのか。何をもって“豊かさ”というのか。このテーマを思い出すたびにいつも同じことを考える。

辞書で調べてみると【満ち足りて不足のないさま。】【心や態度に余裕があって、落ち着いているさま。】と書いてある。平日は、学校が終わると夜遅くまで習い事。休日は、休む日なのに習い事。こんな日々の中で子どもたちは何に満たされているのだろうか。自施設の子どもたちを見ていると、毎日分刻みの予定に追われ、慌ただしく一日を終えている印象が強い。“豊かさ”



という言葉の意味から考えると、今の子どもたちの生活は“豊かさ”とは程遠いものだと感じる。

私はそう感じているが、本当の“豊かさ”は価値観や心の持ち方によって一人ひとり違う。“豊かさ”は他人に強制はできないし、同時に自分の“豊かさ”を他人に押しつけることもできない。だからこそ、学校の時間割や習い事など決められた予定に縛られず、放課後の時間を子どもの家や地域で自由にのびのびと過ごし、たくさんの人と関わり、様々な経験を通していつか自分なりの本当の“豊かさ”を感じる力・気付



く力を身に着けてほしい。また、その力を使ってより豊かな未来を切り開いていってほしいと思う。

子どもたちの長い人生の中で私が関わる時間はほんのわずかではあるが、今私が子どもたち過ごしている何気ない日常が、そういう力を持たせるための大切な時間であることを胸にこれからも子どもたちの成長を見守り、心の育ちにつながる関わりをしていきたいと思う。

今年度の振り返り

平和の子どもの家
藤田 凪紗

平成 26 年度、地域の子ども研究会。今年度初めて、子どもの家の担当となりました。

私は、小学生と関わる時間があまり無かったので、学童でどのような活動・遊びをしていいか、不安でいっぱいでした。しかし、地域の子ども研究会で、「地域の子どもたちの豊かな生活・成長を目指す」というテーマに沿って、他施設の方々と話し合いをする中で、子どもたちとの関わり、保護者の方々への対応の仕方などを学ぶ事ができました。

その中でも、「行事」と言う部分がとても大きかったと思います。研究会主体で開催した、ドッジボール大会。本番に向けて、平和の子どもの家のみんなで力を合わせて、たくさん練習をしました。練習を通じて、保護者の方々とも、楽しい会話できました。一つのことにつき、全員で力を合わせることで、子どもたちとの絆が深まった気がしました。

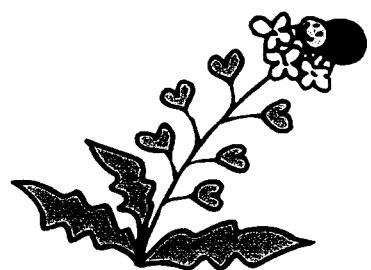
学童期という大切な時期。

様々な力がついてきて、友だちとの関係の中でも、トラブルがおきるという事も、少なくありませんでした。気持ちがぶつかり合い、時には手が出たりすることもありました。子どもの家では、言葉遣い、ルールや自分で出来ることは自分でするという事が、目標の中にありました。しかし、トラブルがおきたときに、とっさに子どもたちの口からきつい言葉が出たりしていました。私は、子どもたちの心に寄り添うということは、とても難しいことだなと思いました。

トラブルというところから、様々な対応方法を考えたり、子どもたちの成長という面から考えたりできたので、とても良かったです。

平成 27 年度、改めて子どもの家を担当させて頂くことになりました。研究会活動での学びを通じて、自施設での活動をより充実させたいと思います。

個々と協働の精神を忘れずに、コツコツと学んでいきたいと思います。



2014年度 地域の子ども研究会 施設一覧表

施設名	〒	住所	電話	FAX
愛染橋児童館 子どもの家	556-0006	浪速区日本橋東 2-9-1 1	06-6632-5640	06-6632-5645
阿さひ保育園 つくし会	545-0051	阿倍野区旭町 3-1-6	06-6631-4718	06-6631-1607
育徳園 子どもの家	545-0021	阿倍野区阪南町 5-15-28	06-6621-1901	06-6629-1979
今池 子どもの家	557-0003	西成区天下茶屋北 1-4-6	06-6632-7020	06-6632-7020
今川学園 子どもの家	546-0003	東住吉区今川 3-5-8	06-6713-0277	06-6719-4755
四貴島友隣館 子どもの家	554-0022	此花区春日出中 1-15-13	06-6461-3713	06-6462-1072
長居 子どもの家	558-0004	住吉区長居東 4-11-16	06-6691-3369	06-6691-8292
望之門 学童クラブ	545-0052	阿倍野区阿倍野筋 5-13-17	06-6651-8650	06-6652-8841
平和の子 子どもの家	535-0022	旭区新森 7-1-5	06-6954-0524	06-6954-1961
都島児童館 学童クラブ	534-0021	都島区都島本通 3-16-10	06-6921-4385	06-6321-4385
やまと保育園 子どもの家	559-0014	住之江区北島 3-17-1	06-6682-1746	06-6682-1786